尾張名所圖會

後編

四

尾張名所圖會後編卷之四

目録　春日井郡下

伊弉波刀神社　福嚴寺　曽呂利塚　盛禪和尚道德
勝川旗竿　勝川渡　勝川驛　大光寺
小野道風出生地　大永寺　石山寺　高牟神社
山田次郎重忠　中將菊　羊神社　觀音寺
杉村　下方左近傳　矢田川　守山里
長母寺　小幡里　長慶寺　大森寺
法輪寺　渡川神社　長福寺　洞光院
機織池　毛受庄助　川島神社　篠木柏井
龍泉寺　同裏山眺望圖　密藏院　圓福寺
神屋村　弥勒ヶ嶽　馬嘶石　内津驛
名産煎茶　内々神社　内津山　玉野川

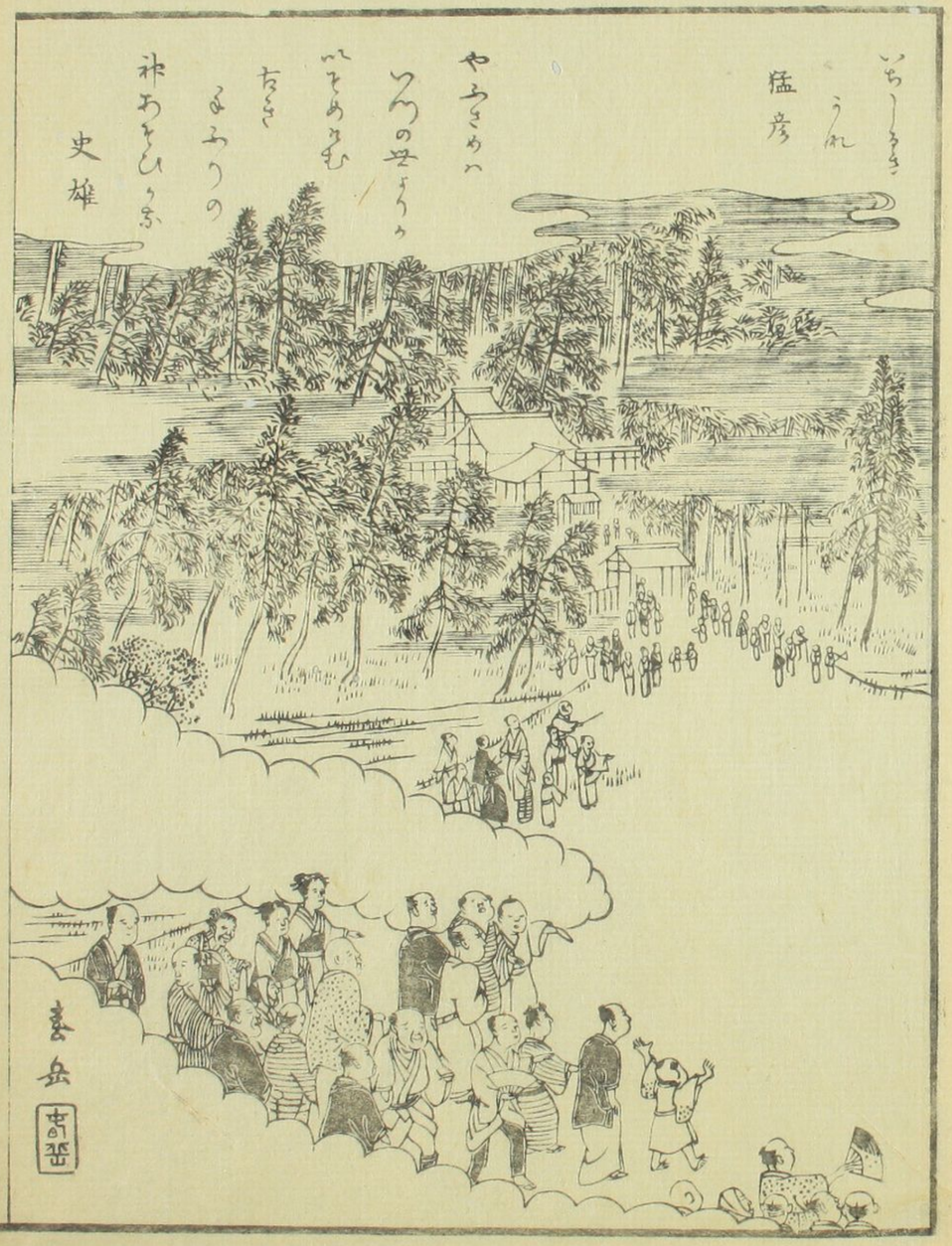
高藏寺　高藏社　鹿桑淵　宗良親王社
志談小僧　勝手明神社　當國山　金神社
感應寺　磯村左近城址　尾張戸神社　東門ヶ滝
眼鼻石　石樋　定光寺　兒岩
蛇ヶ淵　品野村　品野燒陶器　菩提寺
祥雲寺　品野古城　岩屋堂　雲見ヶ峯
三國嶺　雲興寺　菊篭岩　毘沙門峰
戸越　赤津燒陶器　大目神社　萬德寺
龍淵　屏風ヶ滝　名産瀬戸磁器　藤四郎古窯址
藤四郎傳發明像　新製染付燒　六作十作の事　祖母懷土
古窯址　陶器土取場　信長公陶工へ證文を賜ふ圖
陶器製造の圖　陶祖春慶碑　深川神社　宝泉寺
修驗泰澄院

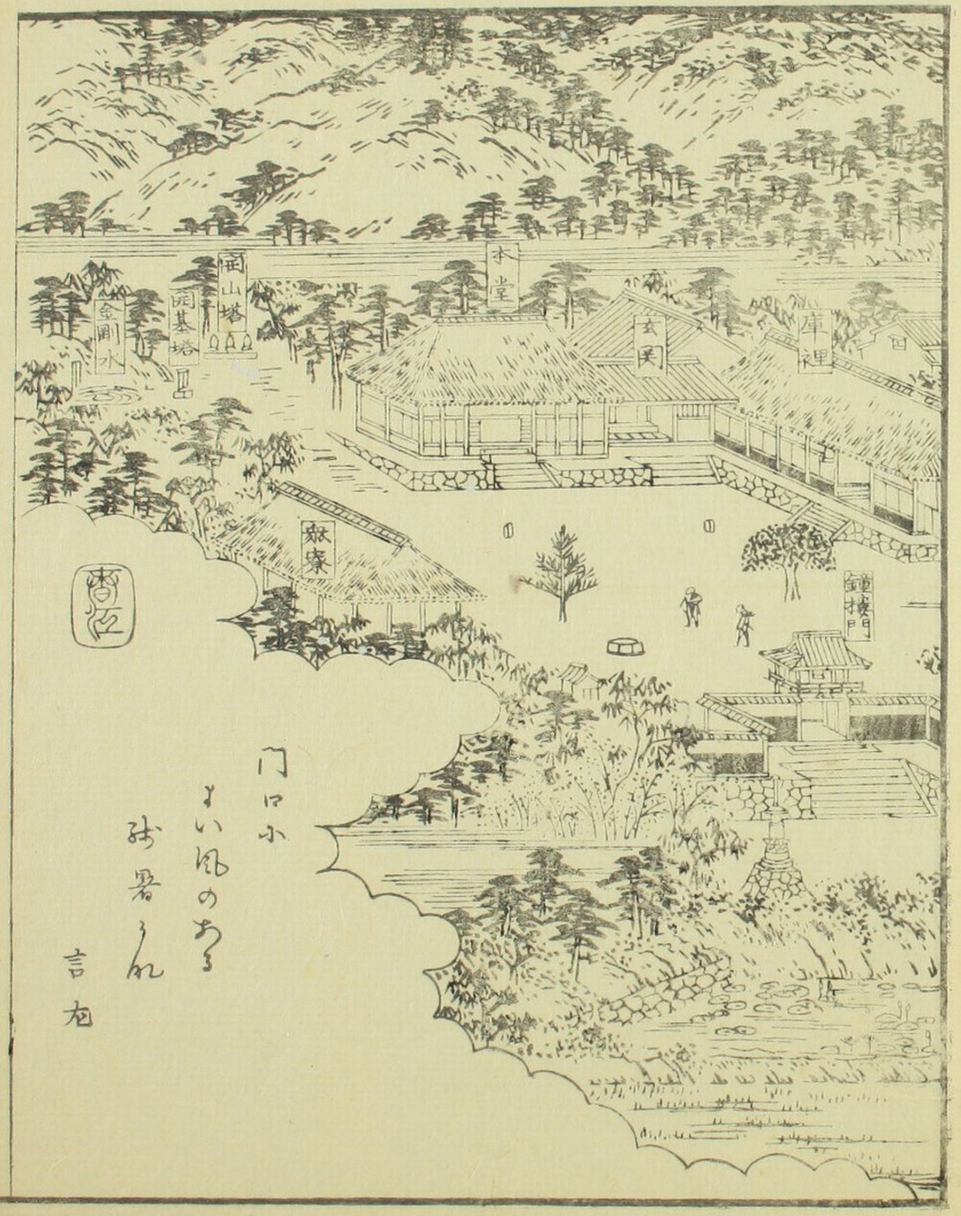
春日井郡 下

伊多波刀神社　四柴村にあり　今八幡と称す　延喜神名式に伊多波刀神社本國帳に従三位伊多波刀　一本正四位下　板鳩とかけり　天神と号す官社なり本国帳集説に俗云古板面西鳩獻神霊故為號〻〻〻

伊多波刀神社

立てく
梅ゑ茂りて
ひろまるを
八まさの高名





門は小
さい所の
秋暑れ
言旭

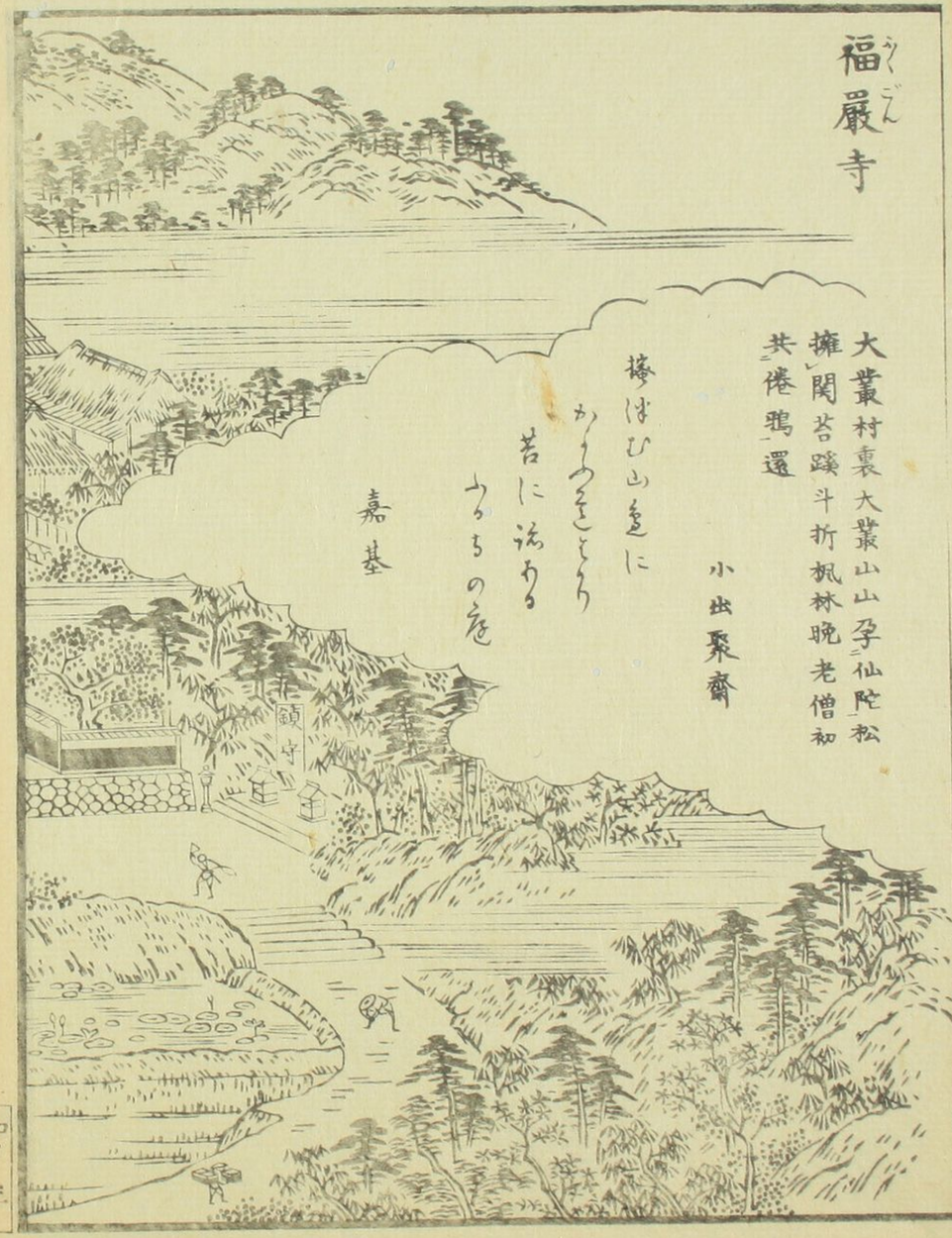
福嚴寺

大叢村裏大叢山山孕仙陀松
擁閑苔蹊斗折枫林晩老僧初
共倦鴉還

小出聚齋

搖ばひ山色に
かすみてとろ
苔に流るる
ゆるちの色

嘉基



霊岳終りに臨み盛禅を喚て曰我附法の弟子性印尾張に有り汝行て
呼び来べし遺言あるべしと則宝積寺に来り朝夕参禅次文明二
年庚寅十二月廿八日性印遷化のち宝積寺に葬り其地秋隠山
て衆徒と客僧たると患へけるとば西尾城主水力をもつて大草山の西小
の地に禅刹を建て号て改て大叢山福厳寺と名づけ性印を
開山とし盛禅を二世とす此人道徳殊に卓れ其頃因幡
関田村に篠城宗八と云者あり強壮勇悍にして盗賊を業とす僕
曽呂利と呼ぶ其黨類多く追剥をなす人を殺すあるに延徳元年
の夏疫を病て死を其黨の者共盛禅和尚を請じて棺を挙んとせに
青天俄に曇り墨雲濃の如く雷雨車軸を流すが恐怖せぬ者
なしに和尚炬を秉て一回相を示して曰三世諸仏亦如是歴代
祖師亦如是天下老和尚亦如是汝亦如是我亦如是棺を扣く事
三下して曰翡翠踏翻荷葉雨鷺鷥衝破竹林烟と棺上に

穂坐して動ずる時に空中に響いて曰極重悪人天将罰禅師不
許我空去と大笑一声して天の如く晴れ見聞する者嘆興
せざるはなし日城洞上傳に曰 性印盛禅の伝は傳燈録にもあり
めに牧合戦の兵火に廃頽に及びを因て五年周省和尚茅
舎を造りしかや曰貫に復す

○本尊 聖観音木佛座像 寺宝 性印盛禅二世の画像西尾道永自ら図して讃を盛禅に与る也其詞に
坪開福地坐断乾坤西天東土盡是児孫と云
金剛井 山の半腹にあり
水に乏しかりけるに盛禅杖を振山に入り座禅して
石を穿て井を掘しに一年生の間水を出す
早魃の年も枯ることなし今に多くの人美
水とす

座禅櫻跡 京察のうち移かわりぶかく今に枯ることなし盛禅
曽呂利塚 因村にあり むかしは古て篠塚に葬る和尚毎夜樹下に坐禅
名とつけり延徳三年に死す後の世の墓なり
つくり宗八が篠城於松と云の伝を聞て里俗なり
とのぶ日て因里に近世に出川村に住し
除年に宗八と名乗し又なし
の子人なり 彼の子孫に因田村に曽呂利
なり 宗八が屋敷も多く孫も多し白山の麓に太鼓の胴あり
ぐり宗八が名を継と云 能紀に曽呂利 長三尺
勝川旗竿 猪川村より勝川天正十二年
に勝川と云 神君に勝川の名を因て
吉兆に直に渡竿を伐て

盛禅和尚の道徳火車の怪を退る図

和尚の道徳ハ本文に委〳〵火車の怪と云る俗説ハ天正文禄頃の俚諺なれ〳〵車る越後国奥沼郡雲洞村の雲洞庵十世北高和尚と云るも学徳全備の高僧にて火車の怪を退け〳〵とひつゑ火車為〳〵乃製なれ〳〵て今も什宝とし侍る〳〵北越雪譜ハ天正年間とゝひろに図る所ハ文禄のころとゝふ共に怪説なれ〳〵其所容の異図ハ補ひるに足らべと云る児孝の友仲を憑せんが為ふ鳥山石燕が百鬼夜行勝川春英が異魔詭武可誌と云る俗本に画きる侍火車の図か委る折衷して画せるもの

[illegible]

勝川渡 同所の川邊にて内津御[illegible]志に尾張国勝川瑪瑙とおもひ浮て[illegible]
[illegible]名あるが始末者[illegible]

牧山遺稿
春風別涙満衣冠氷剣中流自作二龍着一

渡勝川贈原三
氷解平明勝水寒莫怪故人腰下
同
國枝守義

勝川驛 名古屋より内津迄四あを絶本街道[illegible]

朝宮山大光寺 上條村にあり天台宗也四箇所[illegible]
七堂十二坊の大地[illegible]

内藏頭小野朝臣道風 同村の人群書類從の小野氏系圖に 敏達天皇
七代の孫參議小野峯守長男筑前守葛絃の子[illegible] 麒麟抄小道

風ハ尾張國上條村にて生まれ此人ハ右京大夫葛絃の子息なり嫡子
道風次男元風三男伊風女子一人あり何れも[illegible]書あり其中に道風を
[illegible]第一[illegible]同書附録ハ道風寛平五年誕生 村上
天皇康保三年十月卒 七十一歳従四位上木工頭内藏頭[illegible]
性敏書と善し日本三跡の一[illegible] 醍醐天皇の時 勅を奉じて紫
宸殿の障子に額を[illegible]天下に名を[illegible]時道風と朝綱
と書の甲乙を論じあ人議して曰 主上の清判を賜りて互に勝劣を
決[illegible]清判と頼ふ 主上朝綱が書道風ハ劣[illegible]ハ碎[illegible]が道風
朝綱が上に劣[illegible]と作[illegible] 江談[illegible] 好古小録に道
風朝臣白居易の詩をうつす 摸本一巻を[illegible]絶妙二王の跡を得[illegible]奇
世の珍[illegible] 真蹟何ものか[illegible]存[illegible]道澄寺の鐘銘今[illegible]大和国宇
知郡榮山寺にあるのみ古今の碑銘其右に出るものなし又遊絲連
綿章のみ餘人豈企て及んや実に良書といふべし 世上ハ存る真

蹟拓本仁宥をぐうぐう物多くして俗説弄書
記せる事もあり無稽の言く下馬の札い後世の制こゝなる安幾破起
帖とゝるい道風の假名にて群書一覽に帖の真本府下清光院に藏を
相伝へ小史内義頭左風の書うりと明徵なりとゝるも筆法の妙ら〳〵
二王と攀づ卓絶倫なり舊傳蓋訛らざるこゝろ扶桑略記い真
蹟と唐國へ渡されし事と載せ玉勝冒ゝ安元二年　太上天皇五十
の御賀小道風がわける古今集と中宮の御方より奉られ給まと
ありとり又画も妙まして皇朝名画拾彙に多武峯護国院小花ら
大職冠の神像高野山小坂房にわる勢至の像亦道風の画く所とる
とり集古十種小真蹟の扁額数品を出し今見と署ら後に祢小
祀り山城国葛地郡小史庄松坂村とゝ

大日本史曰道風善書遒勁神逸冠絶今古歴事　曜瞻朱雀村上三朝至正四位下内蔵權頭系國史　曜瞻帝最愛其書及造醍醐寺使道風書扁榜一楷一草初撤揭楷書南門道風大喜曰我之得意全在草書矣著集又命書行草法帖各一卷使僧寛建持而往唐蓋欲播其美於異邦也記畧其餘殿壁題字宮門扁榜道風所書甚多紀畧記曉患中風而手顫所書踊生奇體著集　同嘗為福直幹書奏疏　村上帝常置坐側會禁闕火　帝顧

左右曰直幹之疏存否不復問他十訓抄著聞　凡其書一行隻字人競而求之不得者以為恥其為世貴如此鎌倉後世称遒風與藤原佐理藤原行成曰三跡國とわるゝこの朔左の能書ゝる名の多い数百卷の古書に即されい玄に時代遠さ文化十三年五月比村の隣村松河戸村八幡社の境内小さ祉の碑と建つ銘文い左の如し略

壽昌山大永寺

大永ち村にわる曹洞宗　丹波国村雲村同光寺末

建久元庚戌年崇玉菱地の領主
山田氏の叔建ゝて寿昌院とゝひし天台の古刹なりしが無住国師道跡考に山田次郎
重忠居本州春日井郡山田庄小鑒田後作嘱作建久八年三月重忠
因先考重満十七回忌建壽昌院今大永寺是原天台宗とゝ
長次小堂舍佛閣厄燼なりしを永正十七年庚辰の
碧大永元年伽藍と再造して舊貫に復し　信長小大永ち村大永ち古寺の旧称なり川村の産国田伊
岩守時常大永二年に再建しなり　山田氏の裔孫なりし伝へられいもなり　丹波の同光ちより栢悦
和尚ともねして中興開山し天台と改めて今代宗しとの院号
を山号しし年号とりて寺号とし和尚い天文三甲午年九月晋
寂す　張州名勝志　勅賜大永寺号　開山栢悦道根和尚い大化
知幻禅師の号と　勅謚しひ　勅許と降て名けし
号なゝ其上延暦寺貞観寺仁和寺嘉祥寺ゝ　寛永寺ゝのちなとつけし近世ゝも
寛永寺ゝのちなとつけし　勅許の例なれば　かくて岡田
氏宮司村　或い宮化もわけ　大永ち村の古名く　ゝて三百九十名の田地と寄附とゝ

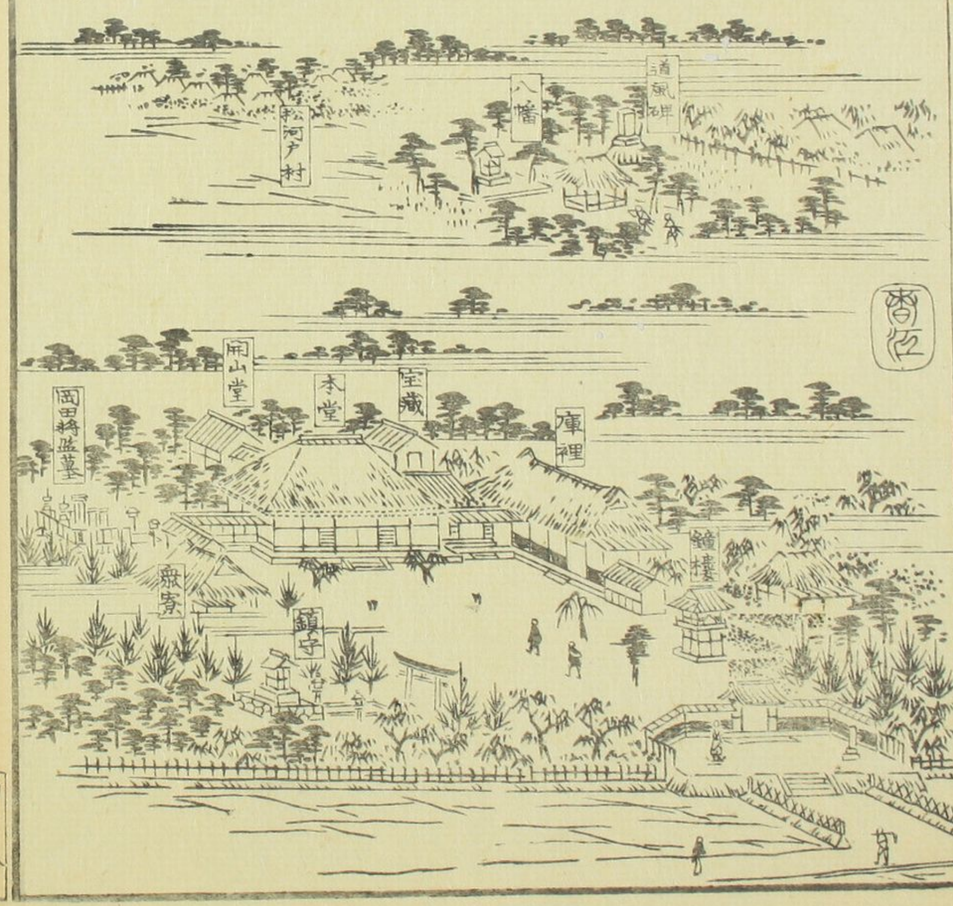
大永寺

小野道風出生地

晴髪偶詠

曾自松川出異才書
家三遊獨居魁怒蛙
攀柳工夫長渤驥追
風草聖閑下筆遍題
能得意寫經縑帛欲
成堆帝称賤奏殊奇
絶避火時隨石右来

岡田建之



ち頃天正の頃没収せらるを（小僧の壁を圍ひ田舎の禅越あるが天正十二年長門守信雄公の勅願を）を蒙り教善に遣ひ（）れ（）ら（）れ（）ら（）れ（）ら

山田次郎重忠

山田村の人 沙石集に山田次郎重忠は義久の時君の清方にて付き人の弓矢の名人ぶりまされりける由しかもやさしくしとく氏の嫡ひと思ひしりよろづ優なる人なり義久記に墨俣川の合戦に山田次郎重忠一千騎待て向ひうる京方武者をいかに組敷しかれかうけ是を山田次郎重忠一人にて防ぎうる者の中に山田次郎中けるはいかゝ様に向ひられうる者ものの尾張川を渡しかゝる者の中に山田次郎重忠の名聞尋ねん

吾嬬の道記

守山の里は名のみ高くれいさしも侍るに油と志る所

尊海僧正

靈鷲山長母寺

同村のうち本尺遠わうの臨済宗京都東福寺末

高倉帝の治承三巳亥年山田次郎

源重忠其母の菩提のために建立し観勝法師をもて開山とする

又の為に長父寺も建立せり今は廢寺となり侍りぬ

天台の教法ひろめ大伽藍あり

弥て破壞せしと弘長三年無住大田國師当山に来住あり

今の宗となる

無住国師道跡考に師諱の無住字は一円別に道曉と号し故郷二年丙戌十二月廿八日卯時相州藤倉にて誕生し梶原景時の末裔なり父の憂に此後出里に生れる人は大果報の者なりと告る人ありと云ふ爰より暦仁元年十三歳寿福寺に入て寺役を勤む仁治元年十九歳常州に行て釈族の出家する宝元元年十八歳常州法華寺教王坊法橋に給し俱舎論頌疏と聽受す宝元四年名徳大半関東に住し師則三井の四章教王坊法橋に給し俱舎論頌疏と聽受す宝元四年二十歳法身坊上人に従て法華玄義と破問を学ぶ建長五年廿七歳師恵らり三学兼備の志ある為に住坊を捨て律院に入り同年世良田の長楽寺に行て歳朝上人に給て釈論と聽講す建長六年廿八歳遊世の為なる建長七年廿九歳園城寺に入り実道坊上人に給て止観を学ぶ其より南都に行て五六年の間律学を学ぶ座禅に志深く弘長元年三十五歳又関東へ下り寿福寺非顔長老の座下にて四年を経て座禅に志深く一年も満ざるに脚氣の病起て坐禅心に任せず弘長二年三十六歳元来密教相伝の志深く和州善提山に上て留り東寺三宝院一流の事相を学ぶ法相宗の法門も此時に学ぶ其頃聖一国師東福寺に住して大に教外別伝の法雷を震ふ師則善提山より直に東福寺に行き国師と拝して天台の漢頂谷の合行秘密灌頂を伝へ大日経義釈菩提心論永嘉集宗鏡録等を学ぶ日夜敬て教外の禅旨に参じ弘長三年三十七歳本国に帰り侍

其後靈鷲山長母寺に来り住し弘安六年五十七歳沙石集十巻と著す弟子無尽道證これを受

京都西方寺に於て梓行し世に書今は至て盛に天下に行る僧俗を絶て多信仰し

して正月の初寿を祝する為物と作りて徳者に授け家に帰て祝りしむ今に永

塔婆に其為の泡多く法華経を用ひ所謂狂言詩語の業とりつゝ讃仏乗の因轉法輪の縁

とあるさんくのごとくなりや永仁三年六十九歳高野山に上り加持土沙三斛三斗と取来り山内

小散に布く此山に葬る所の亡灵得脱の為なり正安元年七十四歳聖財集三巻長母寺にて

これと著し蓮華ちりて添削し仍て今現に母寺の宝なり多云あり正安二年七十五

歳妻鏡二巻これと著し故元三年満八十歳寺内金剛幢院に於て雑談集十巻これと著し

弟子道眼これを受て本州万徳寺にて梓行し師これを無為に譲りて内桃尾軒に退隠し

多自省録なる紙にて背徳と云ふ今仮名にて西和元年壬子八十七歳十月十日遺偈を述て曰一滴浮海八

十七年風休浪静依舊湛然と泊然として入定し尽く天文十五年大四国師と謚す

かくて在位のうち伊勢の桑名郡益田村の蓮華寺を兼帯して四十餘

年任職のうち常に熱田宮と信じ数度宮あり大神も師の

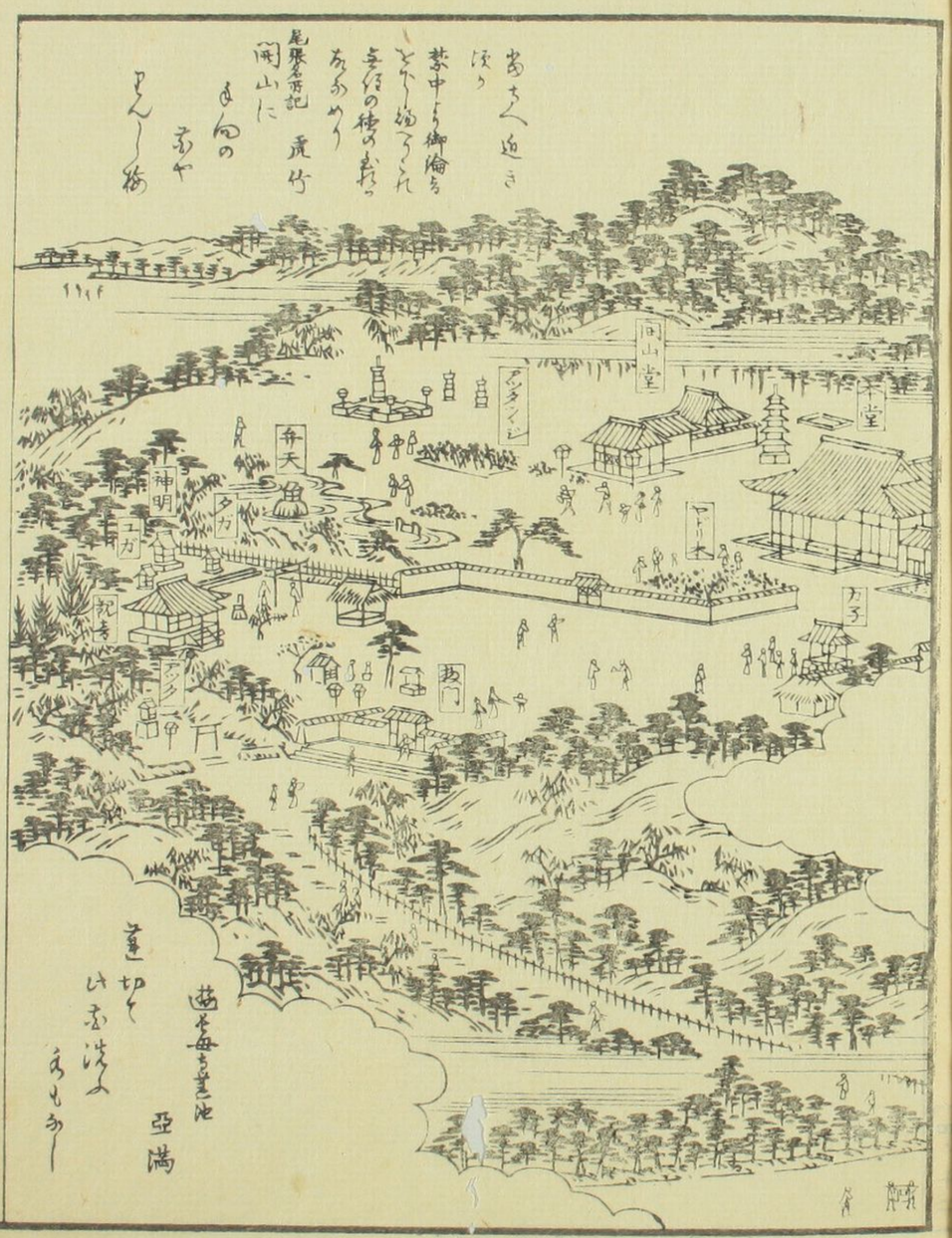
道徳を仰ぎ給て五種の宝器を寄せ給しが今は多く散失せり

其中の一品として唐躑躅と云る名木あり むしろ人は木と

して庭前に植しに忽狂乱せしが元のごとくなる事因果物語に

云ふ国師入定の後益勢菜して堂舎僧坊甍を争ふ秀吉公

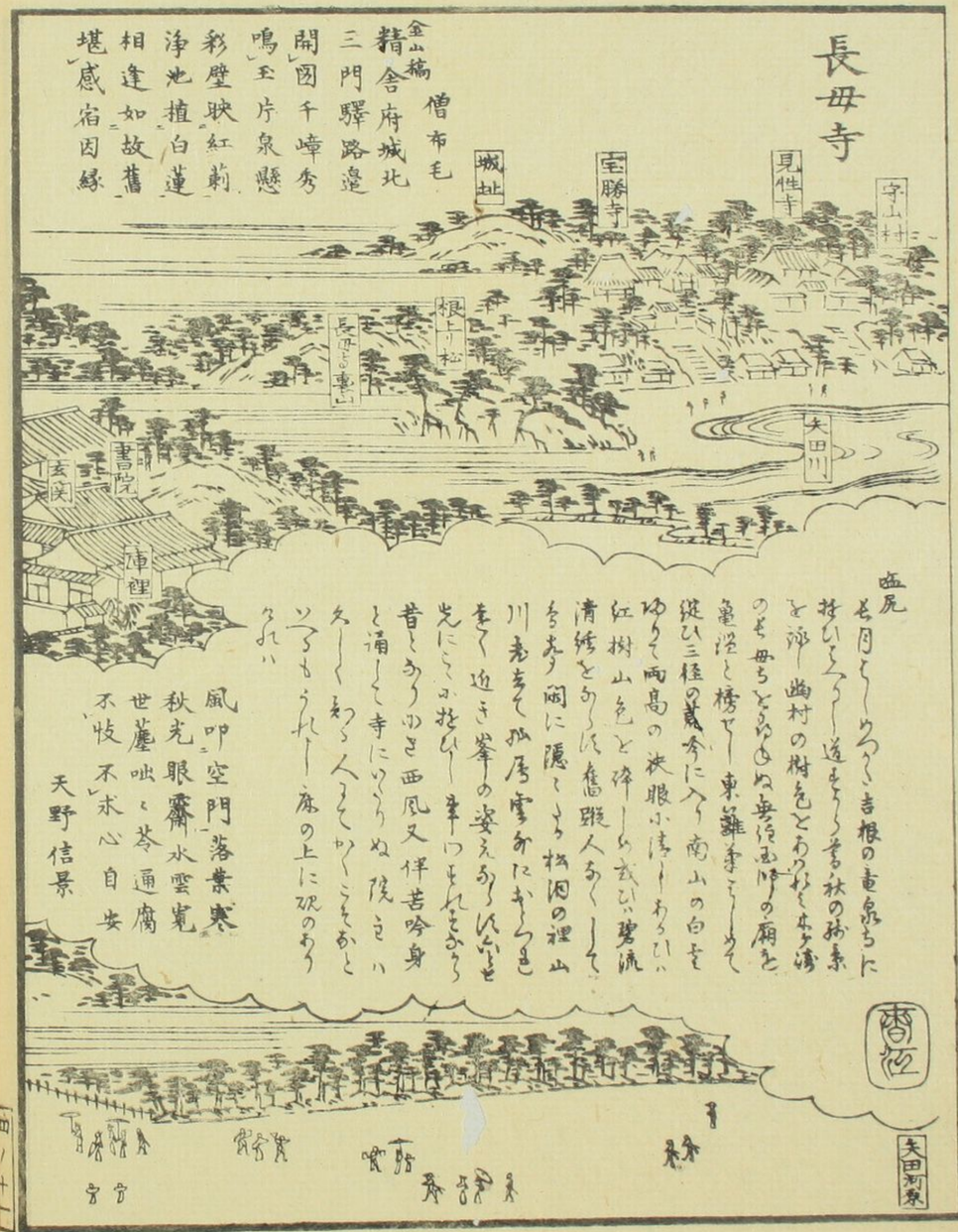
に没収せらるゝ足利織田家の寄附あるゝ古領も廃して仏殿坊舎も



長毋寺

金山稿 僧布毛

精舍府城北
三門驛路邊
開図千嶂秀
鳴玉片泉懸
彩壁映紅葉
淨池植白蓮
相逢如故舊
堪感宿因緣



西尾

長月もすゑ〳〵になる〻吉根の重泉ちに
村いろ〳〵に遠もろ〳〵青林の秋素
を沖し幽村の樹色とあひ〳〵ホ〻湾
のも毋ちとゆるもぬ無住玉淨の廟を
亀淫と榜て〳〵東離寺こゝにて
從ひ三径の蒿秀に入て南山の白雪
ゆゑて西島の秋眼小清〳〵あるひ
紅樹山色と碎しゆ或ひ碧流
清綺をあ〳〵奮跳人あく〳〵して
ものゝ岡に隱〳〵ち松間の裡山
川老ゝて孤屋雪分にあ〳〵色
ゝく近き峯の姿えあ〳〵ひんと
光にゝゆ拔ひ〳〵幸ひもれゝをふ〳〵
昔とあ〳〵ゆゝ西風又伴若吟身
と通〳〵ゝ寺にいゝりぬ院をい
久〳〵知る人ゝゝゆ〳〵ゝえあと
ゝゝもうれ〳〵庶の上に況のあ〳〵
れい

風叩空門落葉寒
秋光眼靡水雲寬
世塵咄〻苓通腐
不牧不求心自安

天野信景

兵火小かゝる大破に及びしを政秀寺の開山沢彦和尚来りて再興し其後又微〻として衰へ近世是鑑〻公僧来住し坊舎と菅うゝバ
やゝ田畝に復せしを抑当山ハ矢田川の中ふかくして水ハ川多尚ちの大門前を流れしが明和四年の山つなみに当山真中と押流して自然の川筋となりしの後と流れを門前ハ年波を重ねしかば往昔ハ遠して一山多き左右にお對を○本尊 阿弥陀の木像 影堂 俗に開山堂〻公国師自作の紙活の肖像と安置し 勅諡大円国師の六字と 観音堂 聖観音と安置し 室筵印塔 元禄九年 国君の浄寄進にて建立し安置し其時の導師ハ大和国長谷寺卓丘僧正 鎮守五社明神 境内西の方にあり 田社 門外西の方にあり 大神宮 山神社 辨財天社 鐘楼 寄生樹 中門と入る東の方に往古より此所の木とかハ何の枝とも拾やうなる木の芽と生じ成れ当山の名木なりと云て名作人宅の地に多くあり成りし紀州高野山とそれ山林ハ其他にもあるとも木の桑も名木と称せらるる人を誘ひ出して後ありて其馬と門前につなぎに彼馬義経の命と谷〻急ちれ乱ちし〻 寺室 兆殿司画の十六羅漢とも〻り開山自筆の書数多あり其外諸家の流世寄進 世わ多〻

小幡里 小治田尾張田あとも小治田連某なる人ハ親族と多くハ国にあるけれども八人姓氏と尾張名称と賜ひし由續日本紀に見えるハ日郎小汁村あれども所ふも往

来ふる者所ふの方の山寺に古塚多くあるハ彼氏人墓ぞ〻

榮松山長慶寺 田村にあり臨済宗京都東福寺末山田次郎重忠父母及び兄の菩提のために山田庄のうちに三ヶ寺をたてゝ長久ち母ち兄ちと名づけ少ち父ちハ父の文字に改りしハ同じうるうるうるん詳ならず後世

興舊山大森寺 大光村にあり浄土宗京都智恩院末 寛永十一年二月十二日 瑞竜院君の浄実母歓喜院殿花林紅春禅定尼 吉田氏女 江戸にて亡くなられしハ其菩提のたちに田十四年傳通院の焼肉に一宇の精舎を建立し歓喜院と名付けしと寛文元年六月住僧大竜信誉和尚ふ余〻なりて此大岩村ふうゝ堂舎と菅建し今ハ名に改めたまひし梵刹

○本尊 阿弥陀の木仏 常念佛堂 ふ堂の東ふにあり元福三年浄建立して不断念佛と奥ふうゝ且永世退転なりしとあるなり 国君ふうゝ浄寄ふとうちせるに竹屋三位光忠卿の家と云ふて一地〻 南ちに細めるひぬ

佛日山法輪寺 田村にあり曹洞宗白坂雲奥寺末往古ハ尼僧地にて西宗菴〻と天文三甲午年雲奥ちの大雲和尚再建し堂宇の衰廃を修造し普香山西法ちと名づけ曹洞の法地と成りて因成のうちに因ち号ちりて往ちりしかれば安永三年八月今の山号ちと改め歓迎文殊普賢の三像ハ仏師運菱の作なり佐友次信田忠信の母光明院玉苑昌蓮尼の寄附之次信忠信兄弟ハ陸奥国信夫郡の人佐友庄司元治の子なり義経朝臣に従ひ所〻の合戦に軍功あるゝ兄ハ寿永三年三月十八日八歳にて教信の矢先にかゝり弟ハ文治

興舊山深積
翠濃蕭然物
象感心胷古
墳猶見風雲
氣不怪當年
產巨龍

鈴木真庵

梅の花そろそろ
咲くむつまじ
西の白ハぬ
雪かそろそろ

至清堂

二年四月十三日苦戦して義の為に命を捨てし甚母悲歎ひたりしが尼となり二子が菩提のために
神の仏閣灵地を拝まんとて登りけるが西宗養の尼僧にあうわりなれば尋ね来りて やうぬかして
養ふ力をよくもにたりて仏 破石文庫裡山門等の修復を始めしとなり 方丈に安置し 又淀朝の頃
三像をうつして本堂に安置し 見声の有縁と
賜ふ也て掌善掌悪の二童子に擬して地獄の服を着せ 且灵牌を建て兄を吉祥院八過次信と
名づけ尼を清光院飯勝忠信と法号し 永く追福の志を残す 又は寺年を経て頽敗に及ぶ事
もわりむるの時 彼の料にて長谷寺の建立の中に人ふ也 文字とか
きのこりるもの文に以後為造立金子千枚此御寺牛刀二日置之也六月吉祥日とわりて尼ハ
陸奥へかつる是ハのちに出ちふ碑を立て光明院玉華昌蓮と号 其後年月を経て毎火にかう
衰廃せしハ此時こそあれ こちの丑寅の方の地を掘りぐちて彼手枚の金をぬすみけるも 彼ふ得ずして
ふさ天文年中大雲和尚堂宇を再建 田畑を合銭の父
兵火ふかう大破 及び修復もかうとして 村民ところ 村の南の方
今の地ふうつ 再建せしらん 貞享五年二月 国君より黄金若干を寄附 彼ふ修復
事恩を附し宝蓋をうつして 頂に繋ぎ 又名古屋の土水谷其嗣信忠信の孫を修飾し
かつ 荘厳をあらう 播州明石郡 奥畑村に往昔より佐左衛門と名のる者ありて嗣信忠信の末
孫なりしが 彼れが家に屋敷の大表村に彼兄弟の住牌 本縁のあるを 文政十年
三月書状をもて彼地より 真清田清四郎 御廟の社家 南方の手と 系に境内に
古塚三つ ふさ五輪 彼地より 寺宝に貞治年中書写の大般若六百巻
東遊記に 実州白河の城下より一里半南に 川と云 沢あり 此川のほとりに甲冑堂
甲冑の帰人長刀を持る 本縁二軀 ある
次信忠信二人の妻 ある

澁川神社 印塲村にあり 延喜神名式に渋川神社本國帳ふ従三位渋川天神と

ある 皮社 往古ハ今の地より十餘町ふ小渋川と云所ありしに 遷座

ありしと後今の地に移せりと 大嘗會の齋場ふ祀りし社なり
村名もまたふるし 日本書紀に天淳中原瀛真人天皇五年九月丙戌神祇官奏曰為新
嘗ト国郡也齋尼齋尼云斎部則尾張国山田郡次次此云須岐則丹波国詞沙郡
並食ト 丹波の上の別字印行本日本紀とあるなり 今古留まるなり
なる齋尼の斎場 ありつけ 村名ふ されい 御歳神大食津神大宮賣神等
の御膳御酒 に関りあり
六町と隔る所ふ多居の流れて今ハ田となる又本社の後の方に古
塚ありしと其上に古甕ありて海潮のさしふ随て水の盈涸ある事
ありしとぞ今ハ絶り又直會殿の跡ハ今ふ初と存して南の方庄中
村ふり近年ありて称し諸人崇敬 病年を祈るに必灵験ありて
年愈尼ぶらるる 近ハ及ばず遠路他國よりも参詣して
甚繁昌なり 天正十二年九月廿四日本多豊後守廣孝の制札あり

末社 天王社 白山社 諏訪社 愛宕社 多度社 山神社 八竜社 八幡社 一御前社 金神社

春日社 須原社 熱田社 熊野社
神明社 紅梅社 老松社

例祭 九月廿五日 馬の頭

萬安山良福寺 日村ふり 臨済宗京都妙心寺末 近衛院の久安年中開創しいふ

永八辛未年名古屋政秀ちの 梶山和尚 国祖君の命を奉じて南ちと中興す 梶山八丹波
梅原村の産にて 堀原平三景時ふ 九世の裔孫茂助景義の五男なり 境内に古老永と云

泉ある里人善ふるも之を護ず 後醍醐天皇建武元年泉老泉の三字を題されて此寺に与へられしが今は其
額もうせて名のみ残りたる山下にあり 伝説に仙人の住居に住
ひしかも盛 **寺宝** 大政参議六条有房卿筆 天文年中理心ふる伝書写して此寺に納む 其師画像一幅
個 朝公より梶原の家にたまひしものと云ひ伝へ 濁釜一口中臣向山槻山和尚が家に先祖より伝へし一頼
たりふ槻山は寺に納りしを又信を云伝雄の寧迎ひ
輝本山洞光院 新居村にあり 臨済宗省掛村定光寺末 永禄元戊午年里人遠江より昌巌
伴て此村に来り女夏の故の多きを患ひ此仏に祈りに其効ありしかば
なり元禄の頃伝止水尚るに住てより ちなみに止水の寿を聞て其性詳
ず 俗歴といふに家を出て諸国の寿寧ちに入て雑髪一夫より 越の大安寺山禅師に謁し終に軍
僧の吉と称ら其伝人のすめにより或大堂に住し 法の正法山に特ひんとて出る遠方より
所中より其用途と賦こび集りて 芋しの法とて其ひ妻海の神もつる仲は白法
ふ 和尚と称して廣法の毛姫法師と師と仰ぎ 終に者に帰て終に
草刈山人も少ずつ法師年毎に来て草庵を待びて住すること
其時より 欲しも多く 桃葉集にあり 寺宝元亨年二月
の山ちとして業を多くんと 辞世の一句を残 住ふ 郭公の和尚一幅 辞世和尚一幅 桃
道者享保丙申二月十二日 ふる山寺宝に止水の筆多くあり 集雲止水
葉集一巻 新居八景短冊八枚 欲愛の書二巻 九相画賛 其外雑記あり 又止水法師の覚
柳井 ふ 今も 埃肉ふ 清泉 宝永三年 戒八月末 柳井の紀一巻 其又長
けるで時すまに 住 我 ん 清泉 ある 柳井の清 世ふ 此 妖老 偈
如得 ふ
止水の別号 ふ
機織池 田村 ふ 此所ふ大池 ふ 堤を 四面 ふ 水 住 ふ 人 時 ふ 笠者ふ 占 ふ 五月 ふ 女の機織 ふ 昌 ふ 持 ふ 此 ふ

わるべし 其女を捕て池の中に投入れ 池の中に投入れ 悪魔 ふ 其後 ふ 水害 ふ 白 ふ
其日にあり けれ ふ 其の ふ 機織 ふ 閉 ふ 女 ふ 池の中 ふ 村民 ふ 暴死 ふ 彼女 ふ 怒 ふ
り 五月 ふ 日 ふ 機織 ふ 女 ふ 暴死 ふ 彼女 ふ 怒 ふ
それが 其 ふ 一寺 ふ 建立 ふ 浮 ふ 五月 ふ 日 ふ 機織 ふ 池
わるべし ふ 村 ふ 五月 ふ 日 ふ 機織 ふ 池

毛受庄助家照 稲葉村の人太閤記ふ毛受勝助ふ尾州青日井郡稲葉村の人又柴田隆理亮
古風とあり 母に孝あり 猪家紋ふ 勝家に十二歳の頃より 勝家に仕 一万石を所領素性伝 其名
わるべし すべて朋友ふ伝 毛受 萬く 毛受土と情愛 舎人 長 豊
陸に勝家ふ 柴田の陣所柳ヶ瀬の村 の軍の備 行 先 毛受 歩 剣
を 柴一戦 ふ 毛受 兵 軍 兵 歩 剣
猪 ふ 敵 ふ 敵 ふ 毛受 出 ふ 毛受 出 ふ 毛受 出

龍泉寺

遊竜泉寺

去年曾説竜泉寺今年恩遊蚕月天濃緑已難初夏景勝労猶帯暮春妍不慚老約看花伴却愛同聽入塢鶯作夢山僧来致意沙弥久乏賦詩仙

陳元贇

遊松洞山

日本詩選続編

遠尋蕭寺歩秋山
石逕盤旋草露斑
貢菓孤猿啼樹上
荷薪樵子出雲間
磬音常响六時禮
風景偏憐一日閒
蓮漏漸催帰去處
漸違清境向塵寰

横井五明

僧豪潮

圓通三昧夢驚覚暁天鴉
昨夜千峯雪今朝萬樹花

秋の風　沙鴎

中切也四五村の庄号ゝ和名抄
ゝ也ゝて ゝもに四ゝ庄号ゝ

松洞山龍泉寺

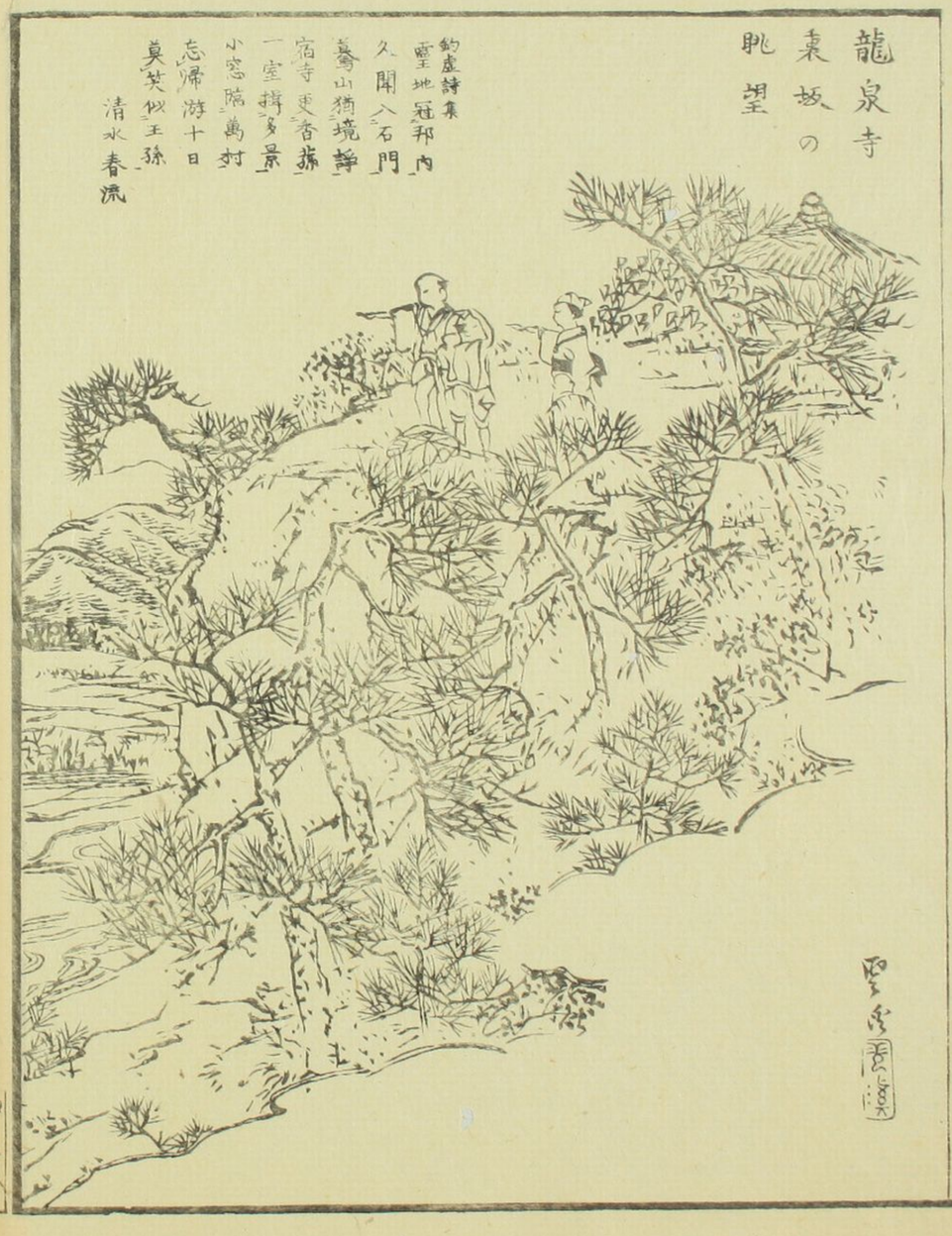
吉根村にあり天台宗 延暦年中傳教大師桙田宮に
也四寄庵院末

参籠して修法わうしゝわる扶童女一人来り大師ゝ逢て告て曰
是ゝ東北ゝわゝゝて地ゝ童泉ゝあり我い其池ゝ住童女ゝるゝ師の
法恩をけゝ永ゝ無生を證せんゝ思ゝ願りゝい我為ゝ一妙ゝ
志ゝ乞ゝかゝゝもゝ後忽然ゝてゝんぞゝゝゝ大師其童女ゝ
ゝりまに跡と尋て南山ゝ到ゝに山の西南ゝ池ゝて其中ゝり
俄ゝ浪と起ゝ童女ゝ沒て大師ゝいゝやゝ前の日熱田ゝて祭り
まゝゝに今ゝゝも尋来ゝ業ゝ祈ゝに ゝ祭ゝ此上ハ
我累劫の苦患を救ゝ乞ゝ清ゝゝゝ大師則法華一實の妙音と
授けゝゝ龍女悦ぶゝわゝゝ今ゝゝ後旱魃ゝゝゝ必ず甘
雨と降ゝて普ゝ人民を救ゝんゝ誓ひ終て池ゝ入ぬ其池を多
羅々ゝ池ゝゝ扨池中ゝり圓浮檀金の馬頭観音の尊像涌出ゝて

側ゝる椎の木の梢ゝ飛ぶゝ大師感喜の思ひとる 茅堂と
ゝゝ其像と安置せゝゝて ゝ幾程ゝ本堂と造ゝ 竜神威力と現ゝて造ゝ
ゝゝ 木尊ゝ崇め竜泉寺ゝ名づゝ 沙石集に尾張国竜山寺ハ ゝ竜寺
夜明けゝい塵ゝ ゝゝゝ南ゝも其跡ゝ ゝ馬頭観ゝ ゝ
ゝゝ 熱田の舊記ゝ南ゝと熱田の沐の内院ゝ ゝ
ゝゝまで即刻の観音の像の 三鈷と ゝ地ゝ ゝ
像に三鈷と図ゝゝ ゝ

其後弘法大師熱田の神宮寺ゝて本地供
と百ヶ日修ゝけるに日毎一人の童子来りて榕ゝ閼伽の水と奉ゝ
大師わゝゝゝて ゝゝゝゝゝゝゝ送ゝゝ山の禁戒多羅々ゝ
池ゝ入ぬ大師ゝゝゝて童神ゝゝゝ事とゝゝゝ夫ゝり結夏のあ
いけ山に十夜ゝ ゝ彼観音の金像と供養ゝ結願の日熱田の
榊を折来りて堂の南ゝ植南ゝ ゝゝゝ茶の ゝゝゝゝゝゝゝ其榊
枝葉茂りて今に迷ゝり此ゝゝ南ゝと傳教弘法南大師の開基
ゝ沒今百廿の夏ゝゝゝゝゝゝゝ四月五日ゝ七月六日ゝけ山ゝ
治ゝ業いけゝゝゝ弘法大師の ゝゝゝゝゝゝゝ

龍泉寺裏坂の眺望

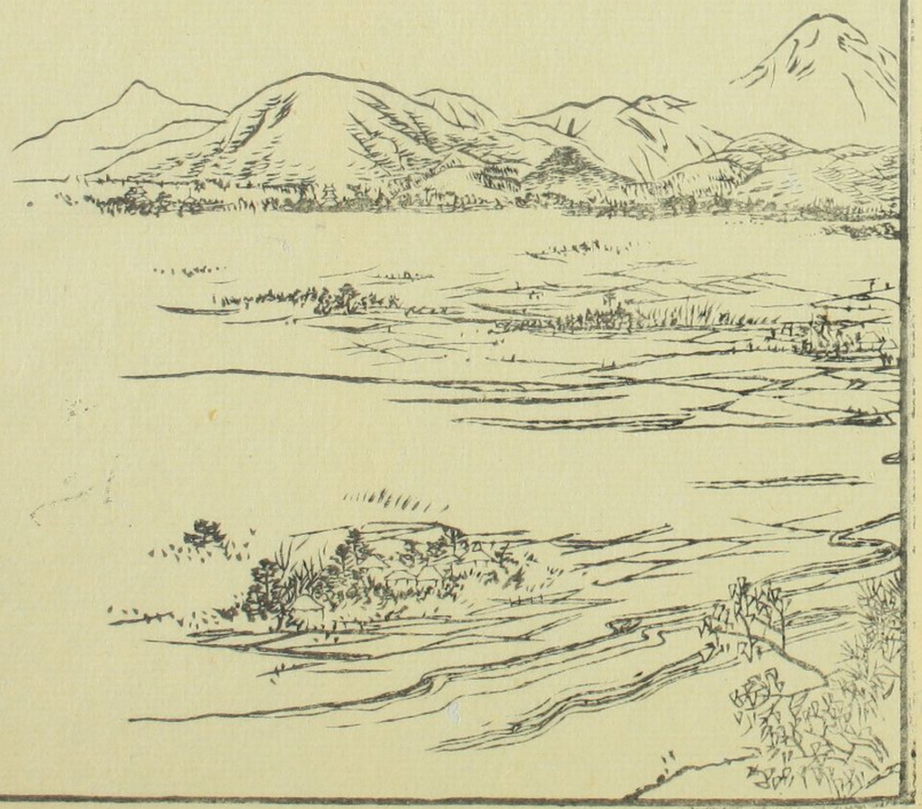


釣虚詩集
霊地冠邦内
久聞八石門
蓊山猶境静
宿寺更香蒜
一室擅多景
小窓臨萬村
忘帰游十日
莫笑似王孫
清水春流

遊龍泉寺

古石層苔細逕長白雲高
聳梵王鄉開僧一鉢一瓶
句謁佛三十三處堂玉野
清流分派脉金城夕照帶
輝光此間開説樵松洞耶
覽衣襟涼翠香

村田梅邨



のゝちに列ゝ三十三訳ありの一所ゝ沢中昔より多くの仏寺大に
天正十二年長久手合戦の時秀吉公の軍卒殿堂を焼ゝ什宝
奮記に悉く失ゝと雲ゝ三戊戌年秀純和尚再興ゝ本尊
二王門多宝塔を造立ゝ
ゝ
ゝむるに信ゝて繁昌の霊地と
なるとゝ殊に近年に開運厄除の守札を織興す　四月十八日又節分
の日ゝぐい清人拝ゝて札守を受る幾多人ゝ救を志ゝ沢

○本尊　馬頭観音像　上に記ゝ溶海ゝ霊験あらたなり海邦名勝志　九工の

周防国の地名ゝ多羅々ゝ池　山内ゝ

ゝ　椎木　ゝ

て株のゝ残りゝと天和年中の暴風　榊木　昔の榊にあらむゝ　弘法大師夏中日参の結

小枝倒れて今ゝ名のゝ残ゝ　弘法ゝ

のゝ残ゝ　西國三十三所　観音堂　近年の建立ゝて山内所ゝに小堂ゝ

當山ゝ勝川の流る傍ゝる山麓ゝて書院及び本堂の後ゝる裏山ゝ

西北の眺望ゝふぐゝる西に金鱗の光わゞやゝかゝて小牧山尾張三

本宮山ゝさゝ尾山ゝ尾山ゝ近江の連山波濤をゝ

水清冷ゝて曠野の平素ゝる陸奥の村落拝面に石ゝ下るゝ寸馬

豆人の往来ゝ遠ゝ風光他に抜ゝて実に堪東北一の絶景雅俗混淆

を為ゝの勝地ゝ為ゝの沢山ゝ童の浮山ゝて和尚の名所ゝ

ゝ

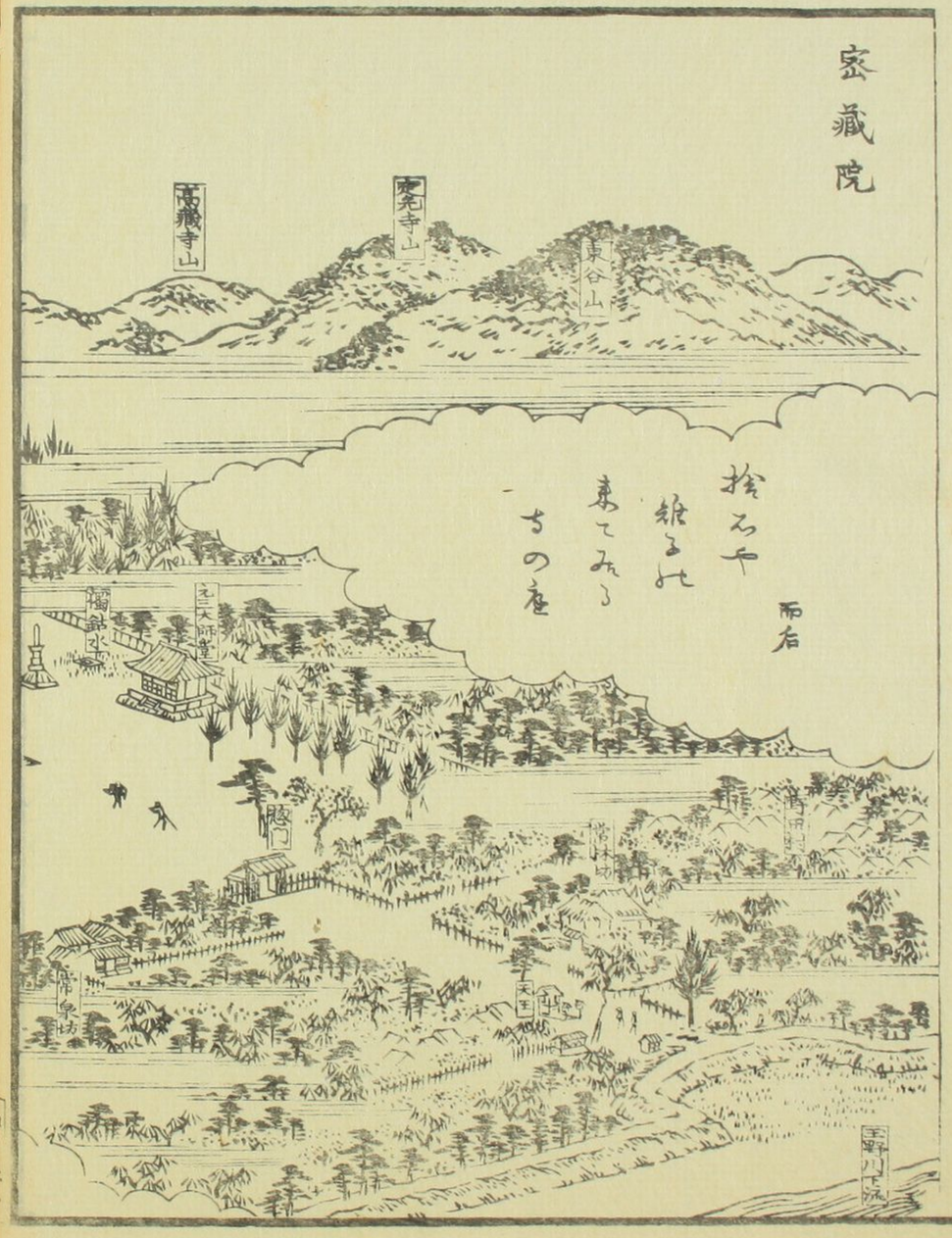
天太抄　雲ゝ時ぬ竜の伏山の名ゝ沢ゝ　源仲正

塩尻に竜の伏山ゝ衣笠の大臣の和歌に　衣笠内大臣

秀吉の陣所ゝ　寒日邊城の暮園河古塞の秋むゝ　天正十二年の夏豊臣

竜の伏山の名ゝ　ゝ　ゝ　

密藏院



拾ろや
紅るゝ
東てみゝる
ちのうの屋

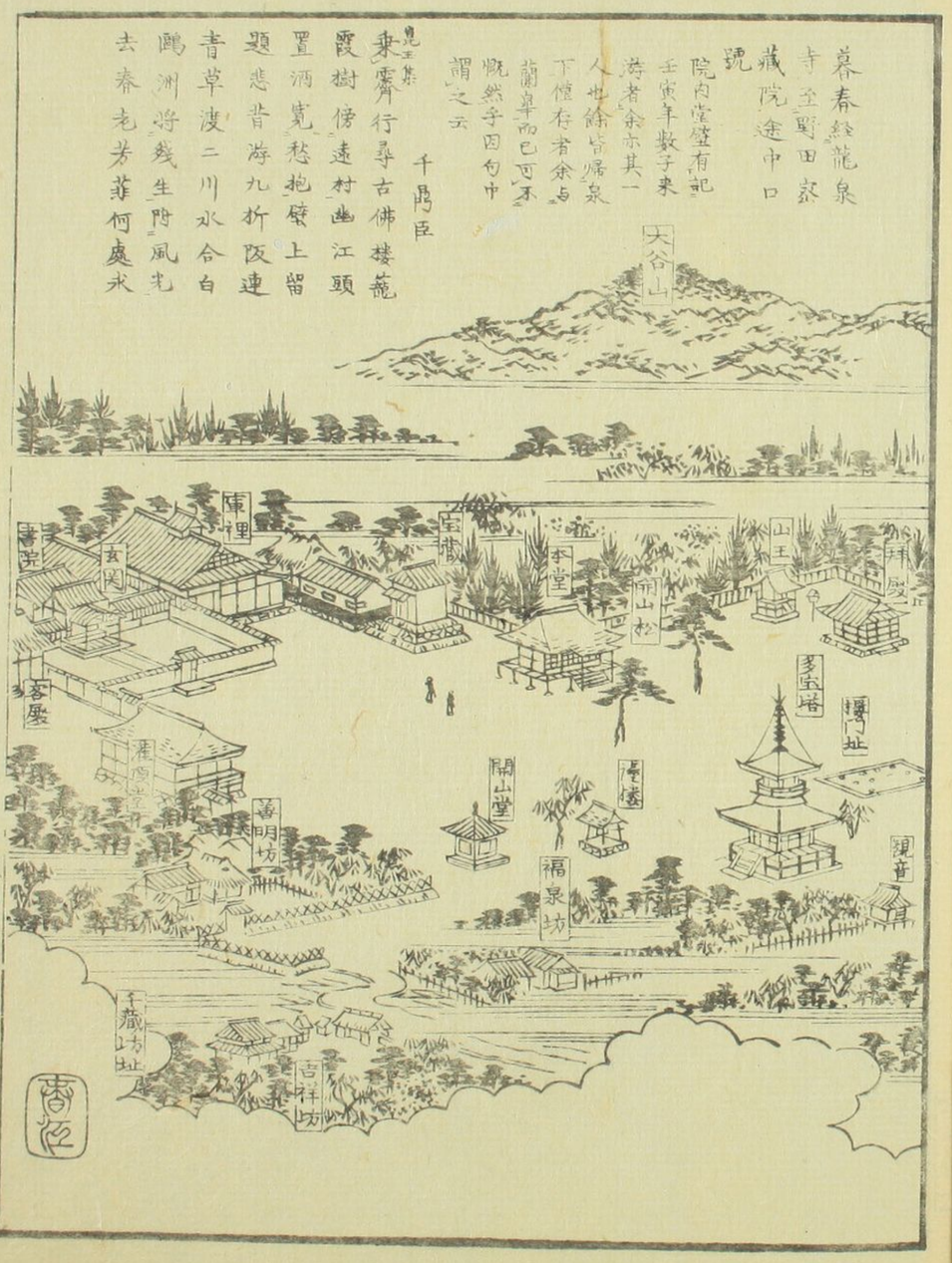
暮春登龍泉
寺至野田密
藏院途中口
號

院内壁壁有記
壬寅年數子來
游者余亦其一
人也餘皆歸泉
下憶存者余与
蘭皐而已可不
慨然乎因句中
謂之云

見王集

千鳥臣

東霽行尋古佛樓蘿
殿樹傍遠村幽江頭
置酒覓愁抱簷上留
題悲昔游九折阪連
青草渡二川水合白
鷗洲將殘生問風光
去春老芳菲何處求

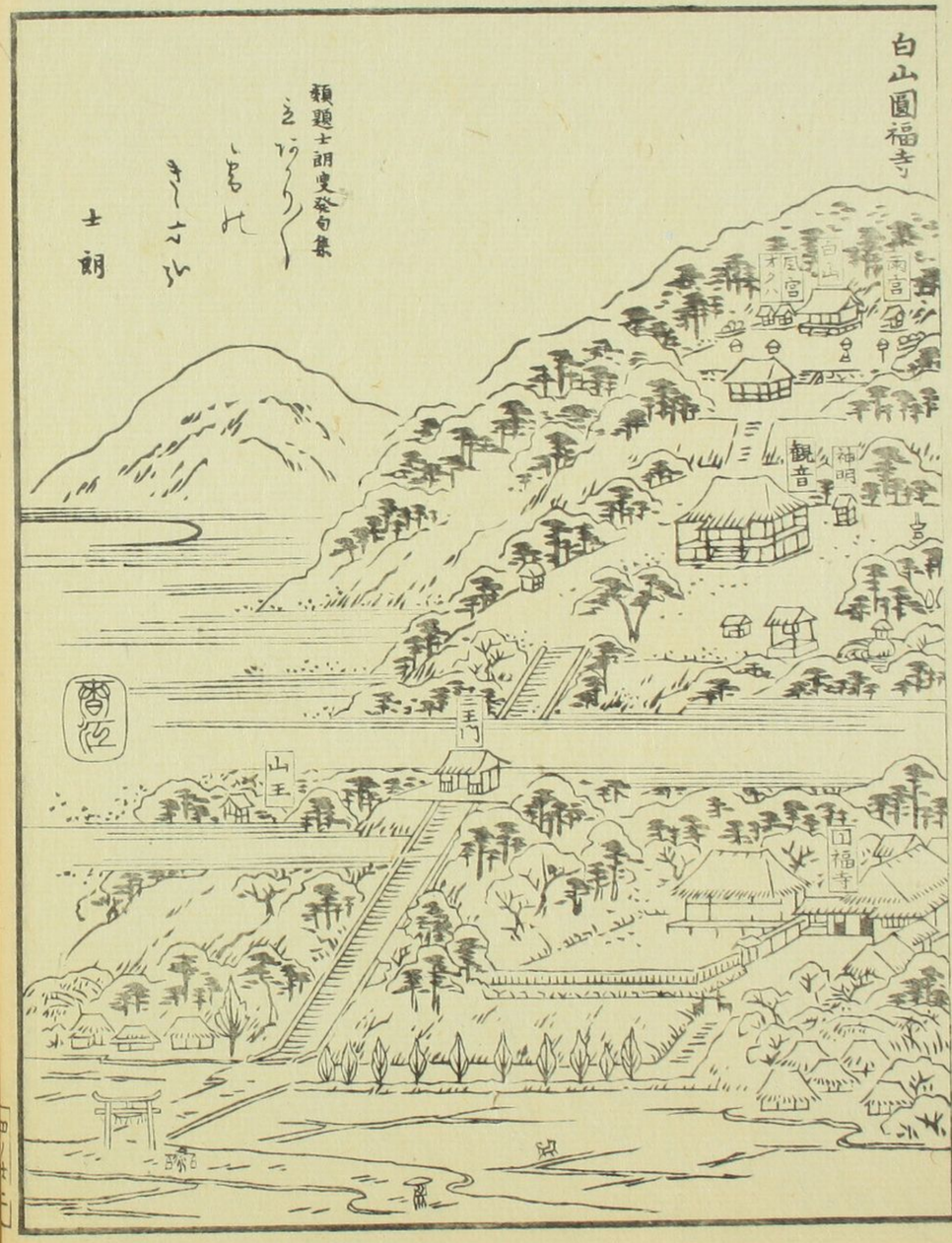


とやうんと怪しおそるべき事限なし　或僧は愛と考へ解き諸人に告て
猿ハ山王権現の使者炬ハ般若の智火なりとハ必天台の言伝来りて衆
生の迷闇を照すべしといひ居らるゝ慈恵上人　大神宮の示現ふかう
て比叡山に来りたまはすとも大徳の夢うつゝ　とうとうと人く悦び
あへりかくて嘉暦三戊辰年当寺を建立し七堂伽藍を営み
寺傳及び三国傳記本朝高僧傳等に見へたり　却説近頃の僧侶
来りて慈恵の法を受る者日々に多く尾張三河遠江濃三河遠江駿河
信濃飛騨伊勢摂津肥後おのゝ土豪に志ある者ハ当寺の指揮
をうけ来りしが中昔の乱世に言伝通ひがたく　豪家の志ち断絶しつゝ
しかるに尾濃のうち天当寺の流下に属して志ちとる寺院今形百と数へ
そうろう　抑当寺の伝法と葉上派或ハ篠本流と称する事ハ慈恵上人
京都建仁寺の葉上僧正（号栄西国師）の伝と田頭房尊雅小文て禅密兼
学の一流当寺の開祖と無しかるべく（栄西禅師比叡山にありて顕密の二教をすべて
終に一流を無して衆徒を教誨し葉上流と

名づけ当寺其規法とする後世に伝ふ）　其後中興珍祐権僧正の時より　東照宮の別当職を
兼帯しより尊寿院小任しかるに当寺には代僧を置く寺務を監せ
しむ

○本尊

其仏の来歴は内陣に阿弥陀如来の木像わるし　元戊辰年　天台宗の僧許を請て名古屋天台宗の
公の寺　一国教の安全を祈る為生駒家の結縁を以て江戸東叡山元三大師の
像と月毎に臨幸を建て山内の寺々と安置
むし　供名行法を勤る例にあれば　灌頂堂　近頃迄当寺の伝法比丘に来る灌頂受
戒と　経蔵古跡　むし顕密の経典と純り　乱世に廃朽し　開山松　杜樹のもとに慈
うし　経堂　慈恵大師の剃り　大日如来の像を安置
とさうり　灌頂井　当郡林村の慈妙院と俗に当寺の奥院とに灌頂井と
うしぶ加持密兜を浦　獨鈷　地
しぶ中ひ　慈妙院を改て伝法の伝教
用ひ旧名あり　慈妙上人亦天供を修　多財天女比石上小　寺宝
後伏見帝勅筆扁額一箇　同宸翰一通　同院宣一通　十六羅漢画像一幅　獅子香炉一箇　花鳥金
屏風一雙　以上の数品ハ　後伏見帝清涼殿の　慈恵上人小　動て行法をうてかしこ
清涼殿　金屏風一双　袈裟衣二領　念珠一連　恩恭金の阿弥陀　金岡筆の釋迦文殊普賢像　慈恵大師
金の弥陀観音勢至其外仏舎利金胎両部曼陀羅灌頂法器具多　大獣院殿の浄法
事と当寺に浄概行わるゝ　乱世に廃絶して今ハ無ふ
塔頭　むしハ三十六坊あるしぶ　五院と称する吉祥坊常林坊善明坊常泉坊福泉坊



勝嶽山圓福寺

白山村にあり天台宗中興慈覺大師の開基なり清和帝の勅願所なり弘法大師の作なる十一面観世音の尊像を安置す下津の湊船に泊りし時蓮窓より東の方を眺めし見れば内津山の麓の色に惜しさ深く空にたなびく白雲の中に五色の光り空にたなびくを見て孟直と呼び尋ねて行くに十一面観世音の尊像と浮び光りを放ちて此地に来りしに四の年の杉あり十一面観世音の尊像を刻みの色にて如何なる故にか此杉の木に掛りけるを湊近くなりて其所に尋ねて其所に至りて勅願孟直なりと聞し其名を杉の木に掛りし衣の後世まで芭蕉を杉の木に掛し衣と呼び我が国の杉の木に三世法仏の影を写し給ふと伝へ聞き地蔵菩薩を他境に遷さんとせしかども動かぬ杉の木の中に三間四面の堂を建て彼像を安置しけれども堂の内に伝へ来りて観音寺と大文字の扁額を掛けしと云ふ文字に改めしと又堂直行基菩薩と清水にて供養の導師にて三世尚に世三観音のうちに列し寺宝に太鼓あり大く畳み九尺ばかり里老の使ふ所呂利宗八が陣を敲きしと伝ふ例に白山社あり古社なれども村名も此社

神屋村

氏奉る所の行宮の跡なり祭礼の日に多くの人集りて賑はしく日本武尊を奉る日本武尊東征の砌内津より此所を経て名づけしと伝へ隣村明知もの通りなれば此地に社あり社あり

弥勒が嶺

米谷村と迫谷村の境にあり美濃の可児郡平原村の境にて山林高く鞍骨嶺と呼ぶ

馬嘶石

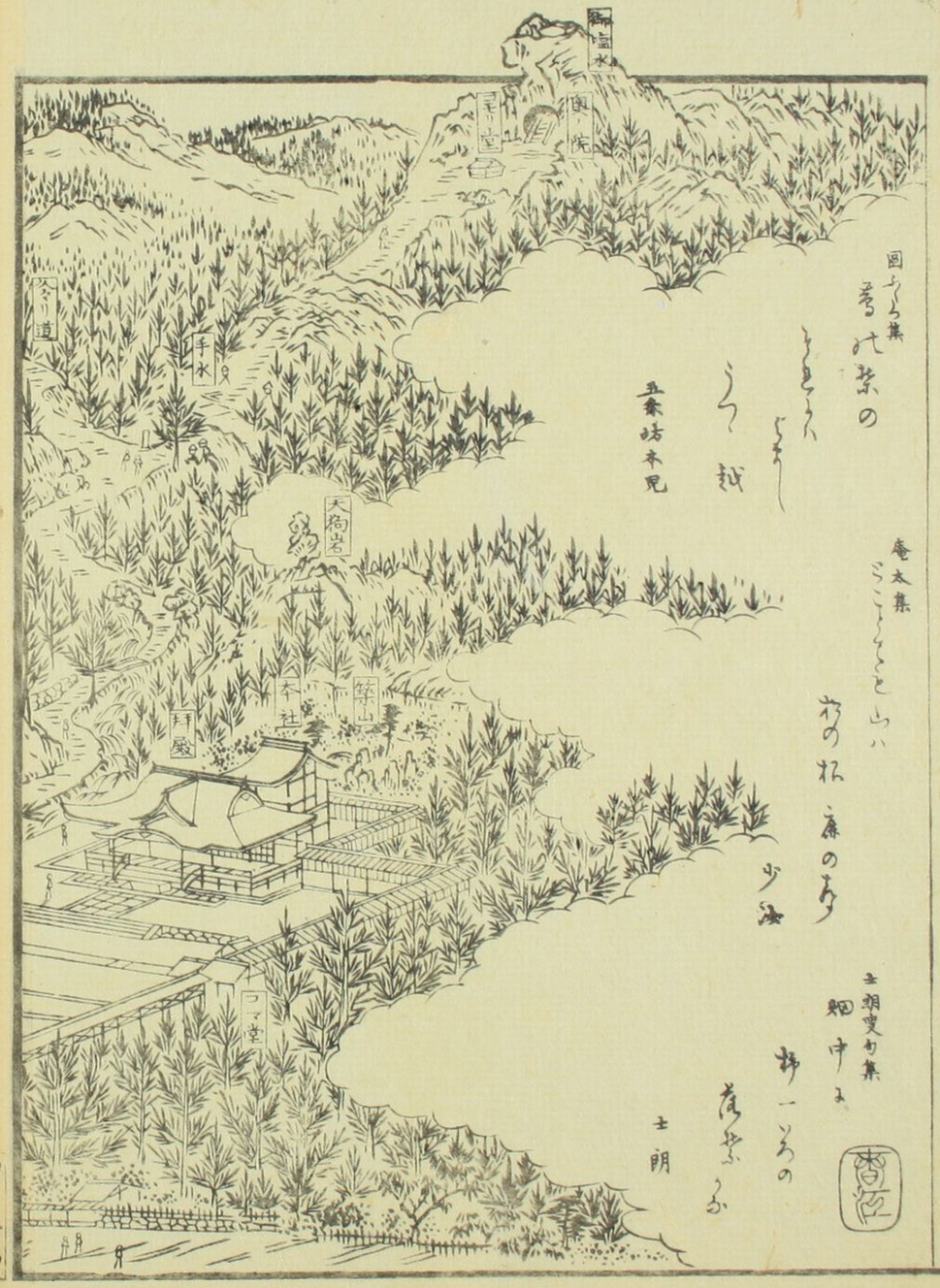
西尾村のうち内津社の一宮居の前にあり石上馬の蹄の跡つきたり日本武尊の乗り給ひし馬の足跡なりと又は鞍骨坂とも云ふ

今天王社あり

内津驛 名産煎茶 内津の山間及び近村にて作る茶は下街道にて下街道と唱ふ高槻の百姓郎
池田村小迫沢諸所体茶盛おわりて常に旅人絶ず旅りき里人
製し諸国へ出る沢宇治信楽小わ〜〜沢茶の為も稀〜わるとおも〜〜品数と共にて其
うち老松〜〜〜〜 国君の名付給ふ所梅渓山と唱ふ九源寺の
沸流〜〜〜〜〜〜 又多治〜〜〜〜〜〜 也有翁の詠あり〜〜〜〜

霊山出芳若風味勝瓊漿午睡枕肱處偏憐蟹眼香 松平君山

内内神社 同村にあり今妙見社と称す 延喜神名式小春日部郡内々神社本國帳小正三
位内々天神とわる宜社〜〜集説小今録天神在春日部郡是小豊
子建稲種命廟祠也とわる此命を祀る社〜〜寛平の頃
田縁起小 日本武尊還向尾張到篠城進食之間稲種公傳從久
米八腹策駿馬馳来啓曰稲種公入海亡没 日本武尊乍聞悲泣
曰現哉現哉 因現哉之詞其地号内津 社今称天神在春日部郡 〜〜〜〜建稲種命張河の海を
みさご多と捕んと〜〜〜〜〜〜〜海小入失〜〜〜〜〜〜〜

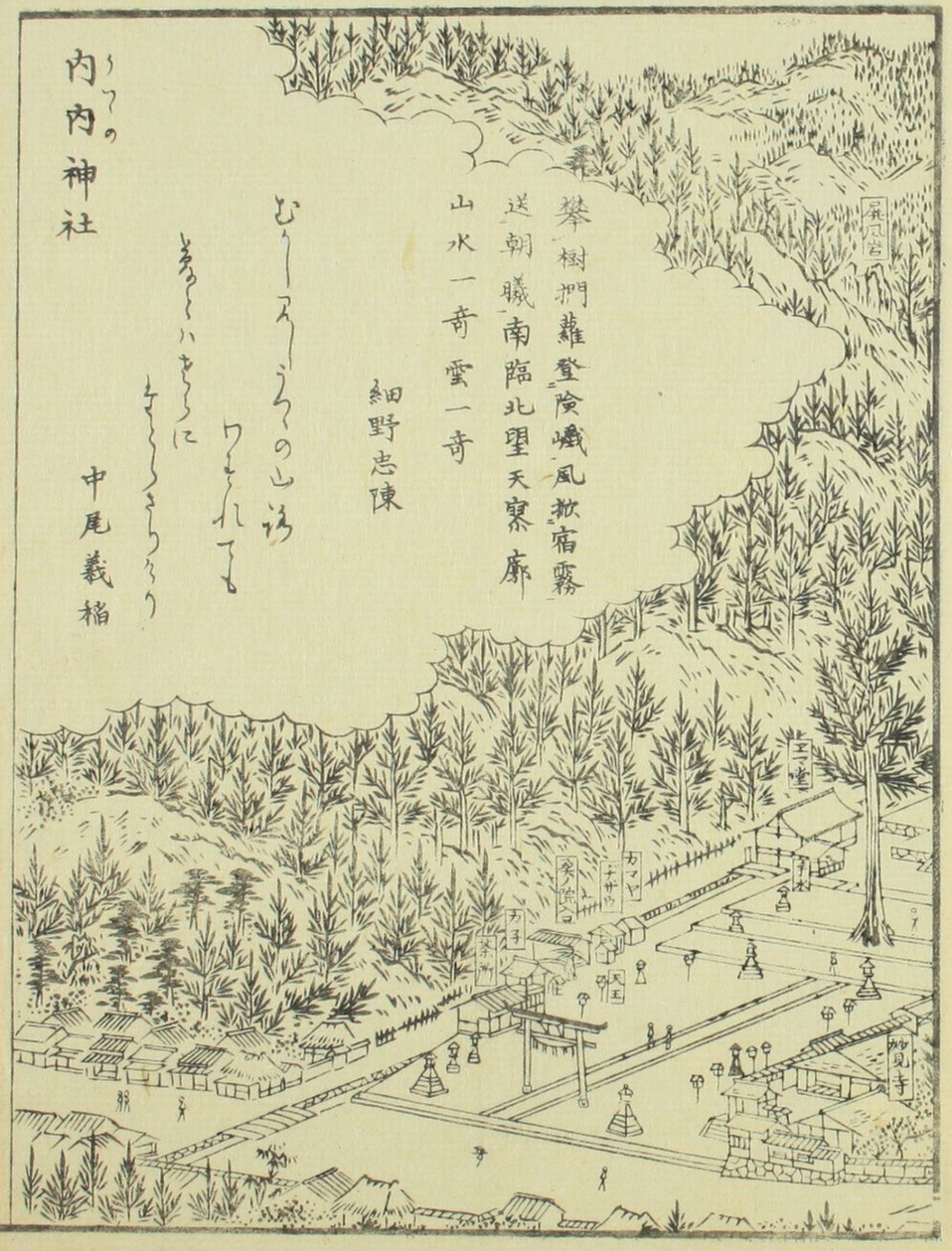


五条坊本見

少海

士朝愛句集
畑中よ

士朝



攀樹捫蘿登険巇風掀宿霧
送朝曦南臨北望天寨廓
山水一奇雲一奇

細野忠陳

むらくもの山路
つたれて
きくはきりに
さくらさくらの

内内神社

中尾義稙

内津山

[illegible]村ハ田畠うゝ山嶺のゝうて畠ゐゝゐゝ東北ハ[illegible]の可児郡池田村にて其所内津の夕嵐しつひうゝつゝ又津村外ゐ山ハ夕嵐吹日多く甚日ハ天快晴する所里人の諺に池田の朝雲山間の田畠わい悉く廉除の垣をゝ村落も頗る疎棲ゐり外ゐ山ゐ秋冬の候毎晴風起りて東ゐより吹ゐろ吹り未明に風止めバ[illegible]日西傾ゐ[illegible]風をこゝろみて晴雨をゐゝらゐ是又里諺に外ゐの松嵐ゝゝひゐゐゐ池田内津の諺ゐ[illegible]

玉野川

[illegible]村の南定光寺の伽藍山に接し水源ハ美濃の土岐川西沢川[illegible]合十三峰の谷ゝ下流の[illegible]南ゐ東南郡の境を流れて海ゐ入る　此川無量の白石水中ゐ出没し巨巖山を擁して断岸ゐ峙ち老松枝を倒ゐて絶壁に聳え激湍石ゐ噴して白雪ゐゝ清流砂を帯びて練をにゝるがゝく水の甘きハ茶を煮るに宜ゐゝ石の坦ゐるハ穏坐を兼るに堪ゐり山の間ゐ傍ゐて列なる百千の松を栽ゑて宛も翠幌を展るがゝく実に山水の奇観至ゐり尽ゐり美濃の金竜道人ハ山水の癖ある人にて天下に周遊しゐる佳境勝地を探討せしゐ[illegible]の奇観をゐて山水冠天下と歎賞ゐゐて山水の奇絶想像ゐ[illegible]葉山に映ひ水ゐ離ゐる事ゐ又十倍の風光ゐり

游玉野

千村伯就

東極山東玉野邊放遨携侶出塵纏奇巖競秀浮雲
外逸水争流怪石俯嘯叢情堪志本末接樵翁訝接
神仙如斯佳境三飡罷自覚歸家臨果然

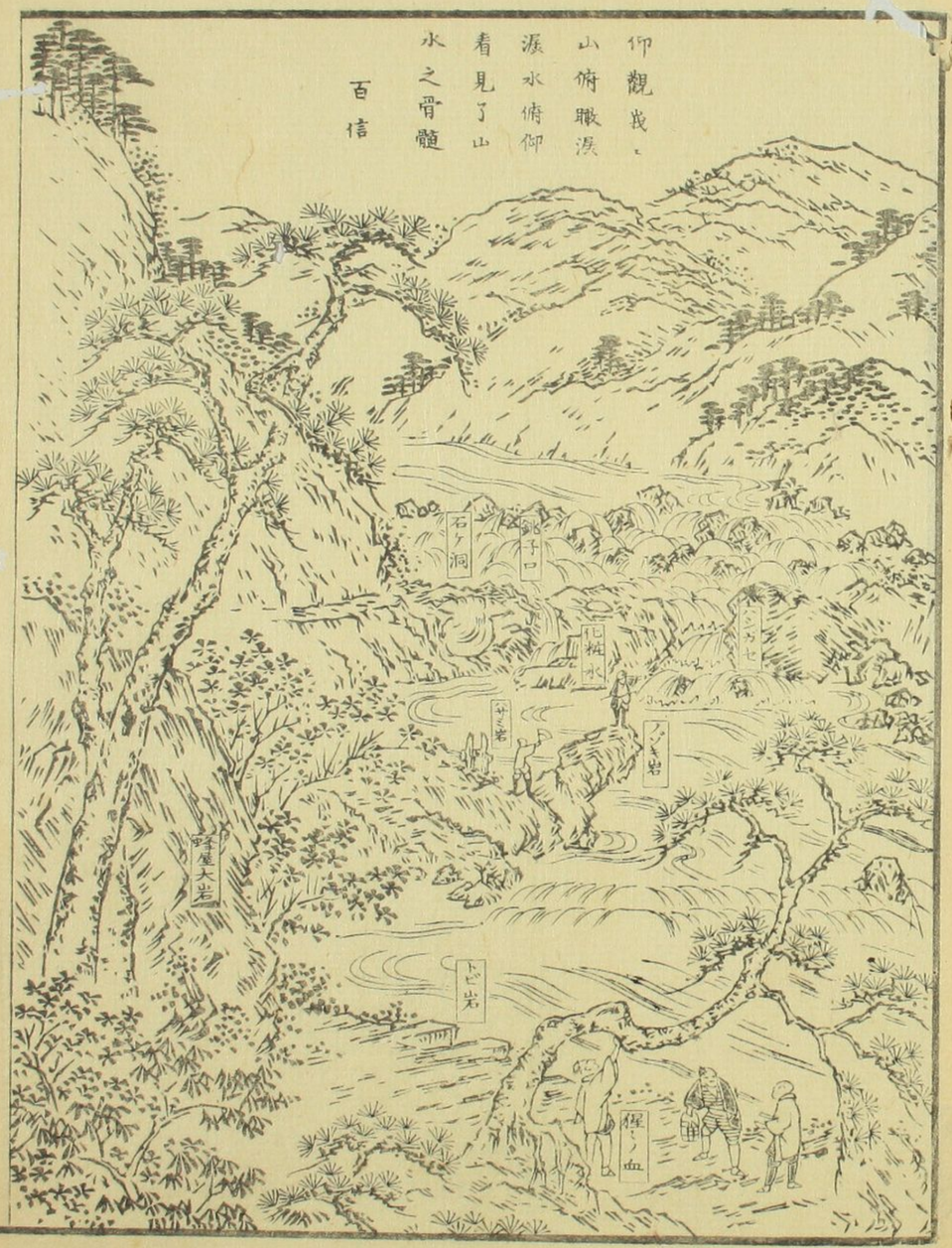
（世相園句集玉野のやうを見るに称するを称して佛ときを用ひ次句の樹ゐ峰ゐ[illegible]）

きゐゐゐゐ淋ゝゝゝゝゝきゐんゐゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]

熟、除聲
戊戌八月廿一日同
春江梅居遊于玉野
兩山相對而高聳
澗水下其間是玉野
川也澗水深處汹湧
宜棲龍蛇淺處屬揭
可以涉而清潔堪濯
纓矣山水之奇絶幾
眩人目也賦五言小
詩十五章聊以形容
焉然何足以抱歛于
山靈水伯乎左記節四

秋光媚我進鞋
遂且詠且吟倉
卒詩行到屏風
巖下看山逾競
秀水逾奇

百信


仰觀哉
山俯瞰涙
渡水俯仰
看見了山
水之骨髓
百信
石ヶ洞
蜂屋大岩
トビ岩
煙ヶ血

其二
蜂屋大岩より
橋ヶ瀬に出る
天狗岩
蓬莱岩
煙々岩
坐禅岩

其三
間の瀬より
新虎溪へ到る
天狗岩
新虎溪
二ツ石湖
七ツ石湖
七ツ石瀑
三ツ石瀑
蛇石滝

水忙而石靜
石黙水還吟
如斯水石美
枕漱信吾心
百信
百畳滝
百目岩
サルトビ
マノセ

高藏社 日村山の頂上にあり顯く旧社にして義経四代の末裔なり傳ふ樊田吉藏宮の奥院なりと云ふ赤社山神社天王社あり例祭三月三日神官水野氏

鹿乘が淵 日村の下流おなじ川の下流にして寺石峰巖を一中に入尾の源より獅子吳まで流れを中に石あり白砂の穏流あり巨巖水を輕舟を操さして紅屋に四方を生看すべし

更に別趣の風景所謂列天地の心地せり

寄記行き日を経て遂を集めたるなり

鹿乘 上流の地あり川の流れ山の左右に甚奇なり岸高く東より流れ水は白練の糸を引く如く格奇奇石或は孰ち或は傾き或は倚作し此内数尺の岩甚稀なり又行て蛇岩茶白岩大越岩獅子岩などの名ある岩あり又行の水の流白き美にあまたあり水たるが日ひに映じて玉の光輝あるに筆し意は城嶽が赤壁に怪しく如ひ杖を投て虎豹か踞一眼を付く千尺の断岸に対す気にあり碧潭口歸む人のゆんも所強痛くやを

一帶清河 旋レ麓流 怪巖奇石 延 鄙 洲 竊思 蘆 岳 湟 川

地渦在 海 東 山 下 頭

川を中に紅流して山の禁を表示す千載の桃樹あり桜葉暮と偏き流るるとて

此先きまぢき紅葉の秋のおりび妻の屋の隅の明るも此地のあり

ふりも出る紅の山つゝもゆるかなしの宮ぬ 清圓

中務卿宗良親王社 下丈田村産神内宮神明社の移社にあり相伝ふ当社の初度小林氏八手止興令の赤裔なり尾張負元の代南朝か

鹿乘潭

赤壁丹崖勢自孤曾挺水府現金軀

戚鹿馭千年更有無怪石生光留王檢燈潭倒影湛

氷壺高秋頗覚宜登涉莫笑粗吟騰氣粗

往〻宸軍に属して数度の軍功あり慶安年中祝王の偽奉一社を当に建て此所に移り祝王の偽奉一社を当に建て此所に移り祝王もこゝにそまりたりしより往古は王冠と称名を称と今に里諺称祝王と称て白日霊社とよび先年府下の處士清水將作成利と云ふ稱家の未裔なりて服者一腰と奉納し今に神宝と成利は九老尚齒令小撰まれ一人なり故に云ふ清虎小中勢に家多祝王清集季花集ありて我地小山伝説一次にあり世の人伝行うとしるんすたゝ云ふ世の人伝行うとしるんすたゝ云ふ伝行て今は新の名ありも伝はれ家なるのこあり軍の家なるなり伝行しも我あり云ふ伝行れは今より伝行一次に おのひとやあに伝れさらし様ありさも我多あるんあるい様に宗良祝王とり幸に玉井伊介及改奉して井伊谷にあり其後遠江国更にまりしに西年八年二月新田義貞大に四武紳大捕上移民紳大捕あど祝王と奉仕新集集は祖夫羽軍と伝一李花集は祖夫羽軍と伝一岳士二萬ぐらも伝ひ国ひけるとて〻〻わけごとく尚小及び関小小祝王を

いつき奉る事いつ〻〻〻〻〻〻

志談小僧 上志談小村久岑寺と云ふ曹洞の伝説にて中世の人なり強力なり大石を擲ちけるは時人志談小僧と称せり

勝手明神社 日村にあり むし南約の屬民多乱をきびしう里人称名の名ふうして鴻峯を切ゆせ和名抄に志談と云ふは志談の誤字なりと云ふ又尚小山の禁に石窟の跡を云ふ法名一神代の人の伝一石穴の一つ伝へられど

古墳の石槨のあり

當國山 下水北村にあり尾張戸の北の法ふまれ山なれば尾張山とのひしを如何なるてのちに東谷山北川に傳ふるに楓樹数株ありて晩秋の奇観なり

山の禁に石窟の跡を云ふ法名一神代の人の

玉野川下流
鹿乗洲
太鼓岩より獅子ヶ瀬へ

跋渉山奥水
来遊玉野川
山水之奇絶
沉疴頓覺蹇
百信

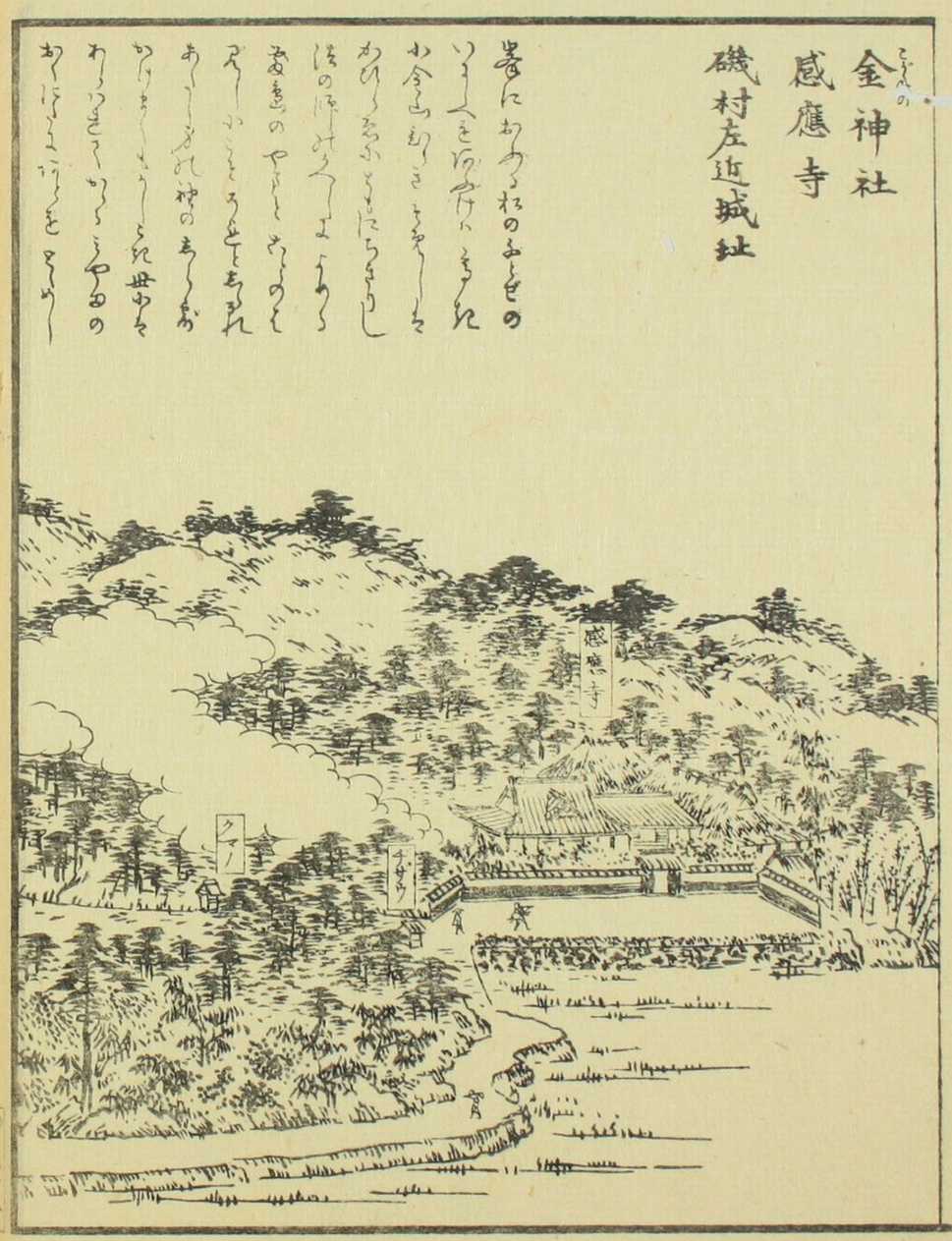
かゝる世ゝを経えて
ゝ
ゝ
玉の垣玉の沖
二村春房

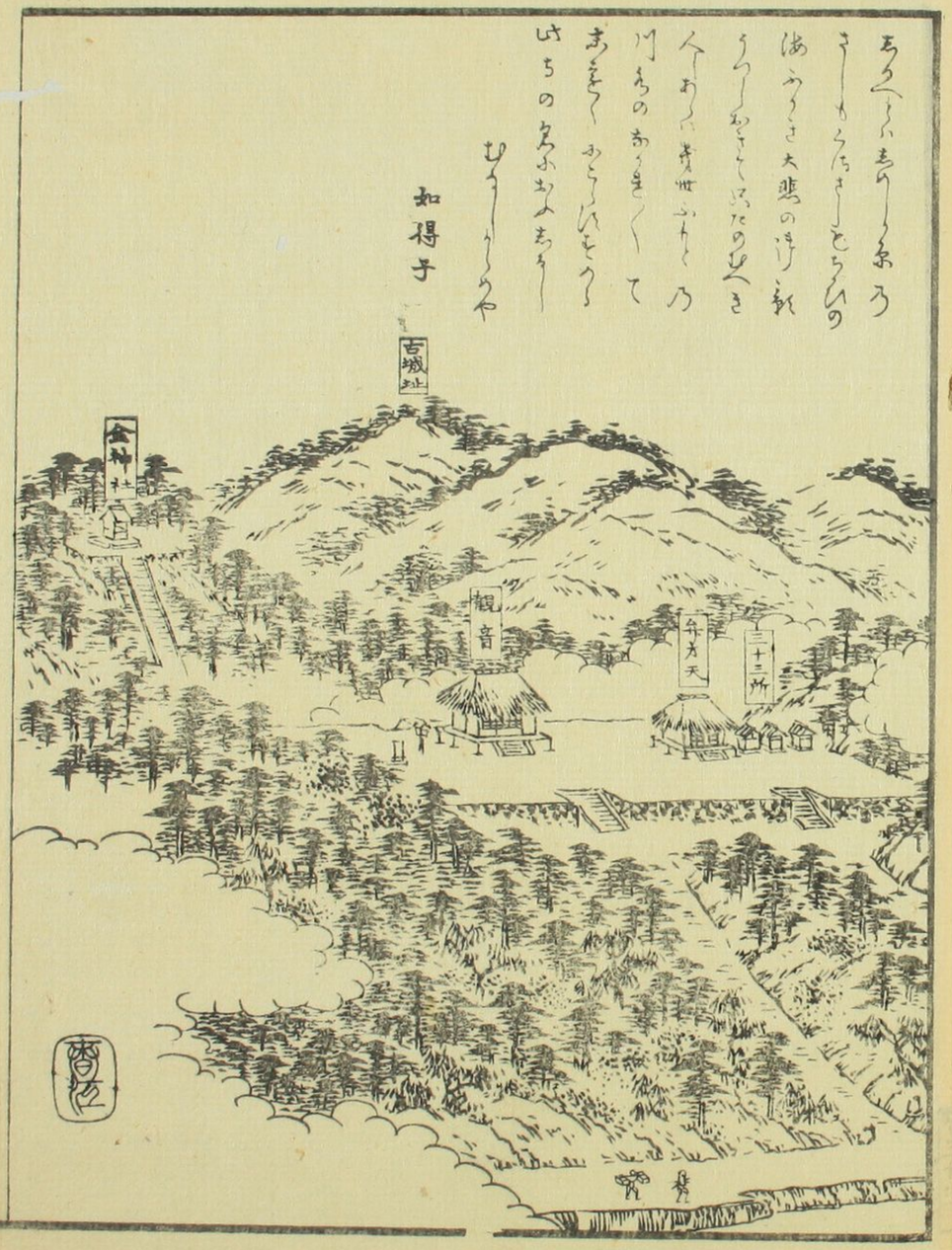
尾張戸神社
當國山

杏花

竹山や秋野
つゝ紅葉の糸
和后

金神社
感應寺
磯村左近城址





金神社（こがねの） 上水北村のうちに金山あり、今白山と称す延喜神名式に山田郡金神社本国帳に従三位金天神と見えたる官社なり、此神の祭れる所に山も小金と唱へ来れり

舊事紀の天孫本紀に見えたる天香語山命十五世の孫尾張金連なり

小金山感應寺 因所かわり陳済宗皆掛村定光寺末 **当ちい金神社の宮寺**なり行基井開基なり

開創の其後星霜を経て寺宇も破壊し元禄の頃の住僧薫

閣梁古き木牌一枚とさぐり得たり行基井開基なり

ぐはめて開山の名を知り其頃如得子が書る開山木牌記に詳

うり又若干はいにに略記 如得子は元禄の頃古に寓居せし当山の八景を作

門田梅雨 前山秋月 橋邊紅葉 大平暮雪 東谷松風 幽溪清泉 等うりの序文のうちに

東谷の松風と東門の滝を云へり今ヒ当溪の清泉は國守の藩侯耳侯のわく汲ませられを

あるべし 本尊 正観音千手馬頭は室羅索如意輪土面の古軀を安置す共に行基の

作佛と其昊話いちぢるし感急佛と称ぜらるべし 秘佛にて住僧と雖も厳重なり

寺号はいちぢるし 開山は不動明王門又其脇は 天照大神春日の神像を安置せり

磯村左近城址 因村にあり人物志に水北村の人佐藤ふ佐ふ今

村氏は此苗字を名のるものなり其事系図

名北の城と称ふ小城村なるべし

いにはの如きものなり

まつ祝の住んやの名ごりとて　磯村千春

尾張戸神社 当玉山に鎮座 **熱神は天香語山命天火明命建稲種命**なり

尾張氏の祖神なり延喜神名式に山田郡尾張戸神社本國帳に従三

位尾張戸天神とある古社なるを近世俗に東谷大明神と称す 國祖

君の御時此山を繫て古き後の櫛を掘出せるに落ちて当玉明神

とかくり出ふよりて当玉は杉尾張戸の神の本

貫の地なる事を東谷は当玉の祠なる事を知るべし

猪竜院君御警蹕の折り此社号を尋ねるに武内尾張戸神

社今は当玉明神と唱へ潜せしが玉号を称すると（今媒の鬼

門とちりなるべし紀伊神社なりと作りて寛文五乙巳年御造

りなり 社僧小川 古社中の持祝は菊理姫命南の持祝は伊弉諾尊を祭る

例祭二月上午日十月上卯日神主菊田氏水野氏

東門の滝 水北山のうちちりが山小わり氏所は禁に水北川を挟て巻松の岱鶯色濃なる中り

のみき自然の氏ある大石あり是等のうちに川水せられて白玉となり 筆捨山と称ふ東海道の筆捨山に彷彿

又氏山にてこれを筆捨山と称ふ

蛇る勝地なり 玉北川

小ぶ〜ぬ絶景なり

東門滝
眼鼻石
世の人は身の
啓
眼鼻石
東門滝

きれの
筆捨山
諸井正枝

石樋

上水は村樋が沢かわりし村のうちなる河天竺河
堆る池の西北にあり
川に流る細流は所と
称するに大髻石の
間に樋の
ぬかる
窪み
ひくく
人工ふかく
ながれぬ山上を
流るゝ水を分ふ
分もかゞ〳〵
さる又うき一勝
景なり

應夢山定光寺

当掛村小わ〻臨清宗　京都妙心寺末

当ちい建武三丙子年　勅諡覺源禪師の開基なり

師名ハ慶宇ハ平心肥前国小味莊千葉氏の子母ハ平氏弘安元年丁亥に生る應安二年十二月八十三歳にて寂す永和四年　勅して覺源禪師と謚す妻〻ハ扶桑僧宝傳延宝傳燈録本朝高僧傳を考て覺源禪師譜畧伽藍開基記地藏感應傳等に見へたれ共こゝに畧す

元和八壬戌年五月廿八日　國祖君御遊猟の折り〻境内の山林及び当掛村のうちを寄附し給ふ其後折々此地に御心を留らさるゝ事たまひ〻たり

寛安三年庚寅五月七日ハ〻

さきヒのうしの御生命にて御靈柩を当山ふもとに奉り住侍喝堂尊師と奉る山頭小おさ名廟壇と建て永く鎮りまつりぬ

瑞竜院君佛殿方丈等を修補しまつり寛文二壬寅年五月七日寺領を寄ヒまつり御山内の莊嚴他ハ矣にして巍〻たる禪刹なり

名古屋のうちハ北にむかひて城内に入る其入口ハの左りハ山と聖天山くらゝ其山下の北に下馬札あり道の左りに甚亀岩あり〻その谷川ハ板橋と架り常に覆ひ〻て平人ハ通るなし其例ハ小橋あるとこゝ其橋より東北ときして登ること六十間ばかりにして廣場あり北の方其他の中央に石橋と架し其石橋とつゝて北に登る小蒼杉老杉左右に表列す右の方の高き所に佇ち天神社八幡社あり其東のうしと星山うしろに通ずるハ偏に石壇と天神坂と又ハ所と登りて山門に

入る其他の石橋より山門まで坂路九十五間ありとい

佛殿

本尊地蔵井ハ小野篁作又脇檀に地蔵の小像一体を安置堂のうしろに水屋あり〻弁財天社

方丈書院

仏殿の東にあり

山門

仏殿の南にあり

鐘楼

山門の内東の方にあり

國祖君御廟

方丈の東の山上にたてまつる二品前亜相尾陽侯源敬公墓とあり石面金を奉じて陳元贅書次四方柳結界　西南のうしに格皮沸門あり柳を沸門とゝ此通路の方に竜今水あり〻沸門を入るとや登り行ハ沸唐門にあり是より内の結構ハ〻〻かこけ色ハ〻にして〻御廟の例に殉死の人〻の墓あり寺尾土佐守直政鈴木主殿助重之志水八郎左衛門正昭土屋善之丞元高鈴木太兵衛重春の五人又寺尾の家来新武家数左衛門浅木重之の家来馬場大郎左衛門井上弥五兵衛志水の家来岡田市郎左衛門の四人都合九基の石碑あり此之〻

開山塔

仏殿の西北にあり行基作の千手観音と安置す

同法衣二領同定光寺号一幅扁額一面中興本性禪師肖像一軀同画像自賛一幅同禪師号一幅二世要門和尚画像一幅大覺禪師画像自賛一幅覺照禪師画像一幅其餘多し

寺宝

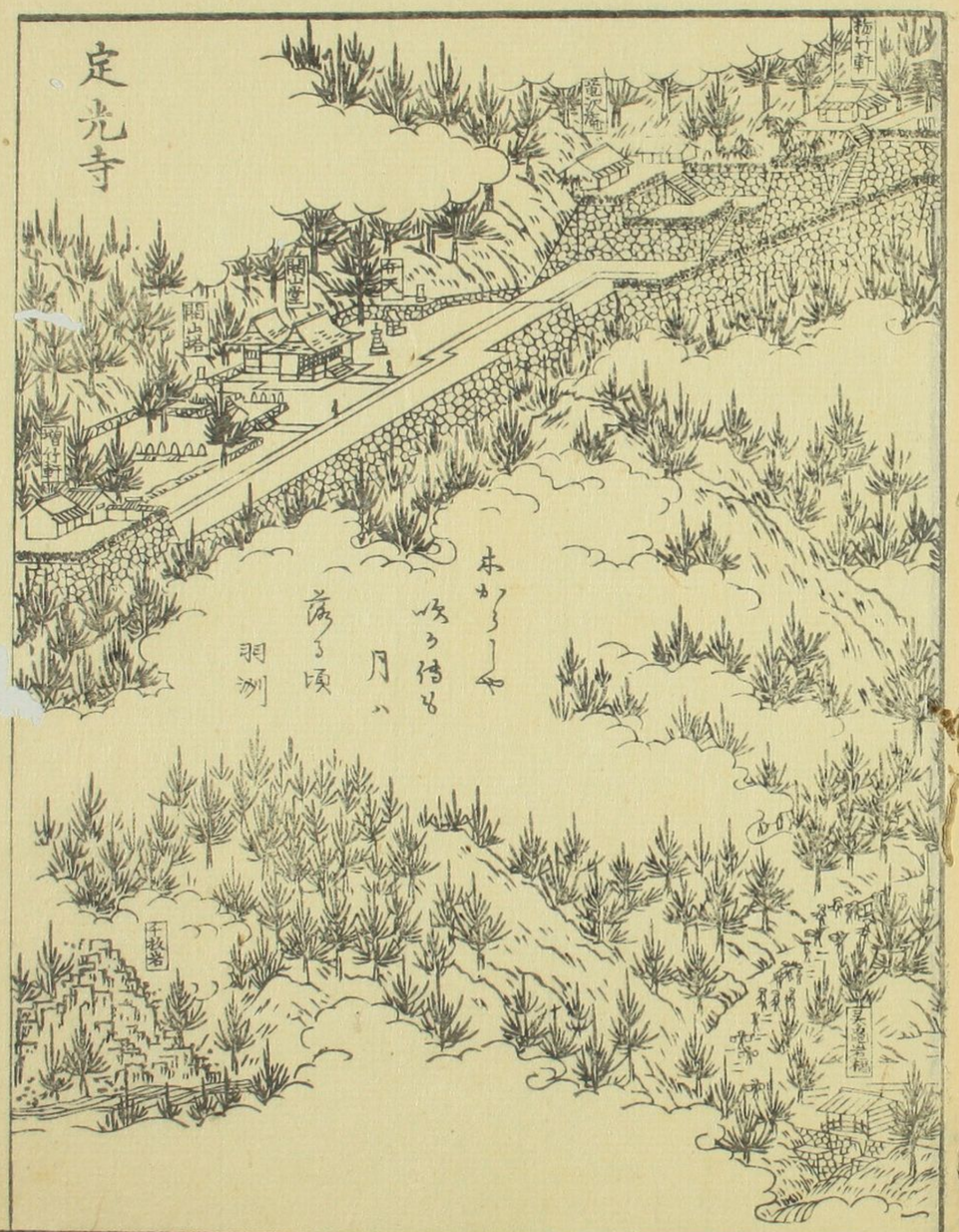
開山覺源禪師の肖像一軀同禪師号一幅同画像自賛一幅

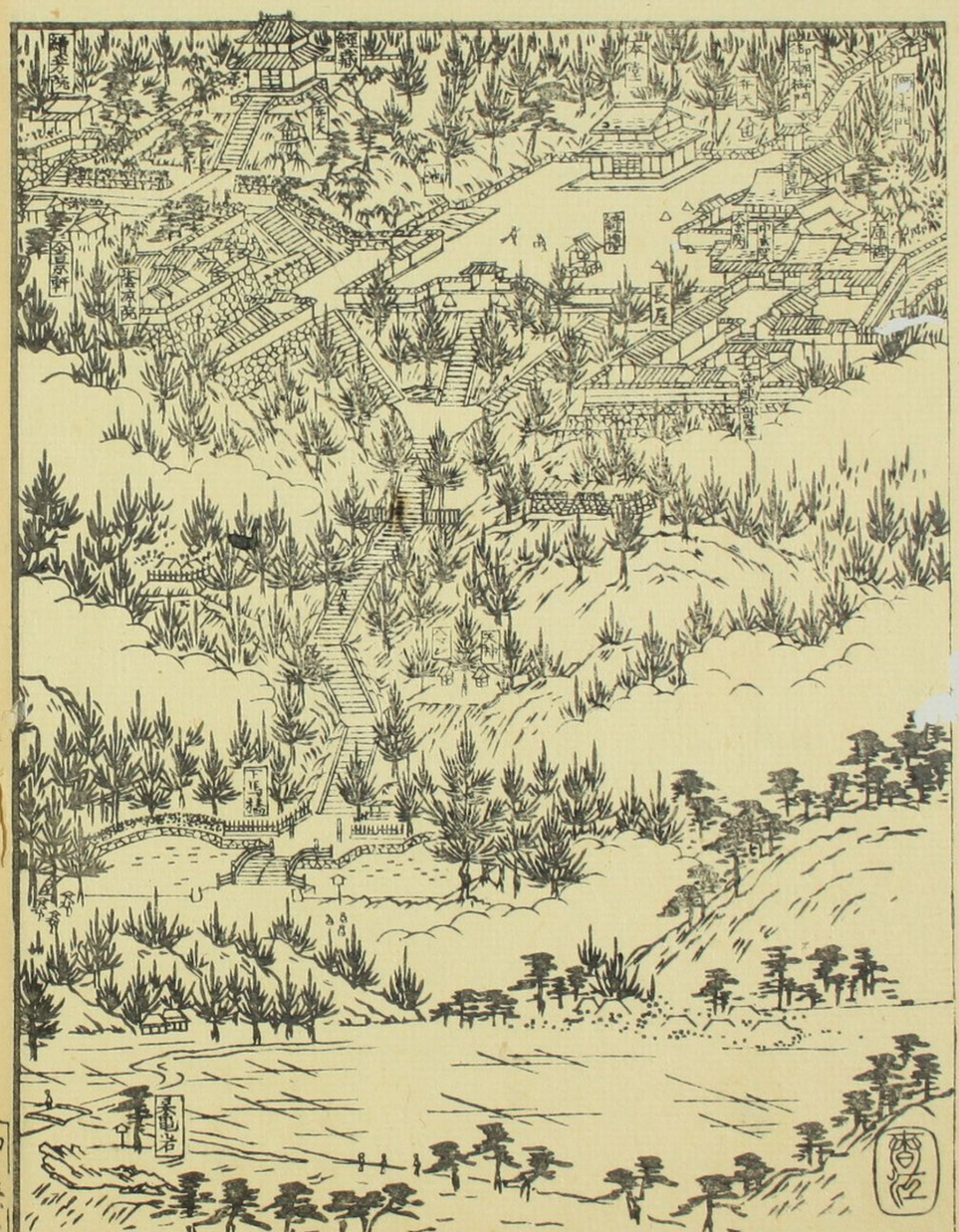
塔頭

蔭涼院金溪軒續芳軒　梅竹軒　竜澤軒藏竹軒　天常山

蔚然たる松柏林磬の美とあ〻四時ハ〻て其色と改変せ沒自然と君子の調に浸〻の節操と形〻其林の氣西嶽を襲て朝暮山間と出やうに霧ハ断の香と絶に忽〻奇像の薜蘿ハ〻常ふしぎを閣さ沒苔地ハ数て山嵐塵とすゝ沒れ清さに無垢の淨ちまつ曇へん

国祖君の尊矣永久爲に清ちまつて御國


定光寺
本かくれ
咲る待も
月ハ
落る頃
羽洲



の業と千五百の後の萬歳よ保護しまゐ無上の崇を八千度れ
秋小廟食しまうん山い高きにわるざしぐも仙ひまば名ゐと劉
禹錫がいつるも今爰ふおわひ合まれ侍る

奉悼尾陽亞相

今茲仲夏七日是何日哉如何不淑
尾陽君侯不豫日久遂即世于武江邸闔國皆驚
無不悲嘆馬既而奉送靈櫬于尾州饗於武
江不能奔哭聊綴埜詩一律呈其家臣以洩餘哀

林道春

二品亞相

亞槐美譽冠搏桑家國懷恩永不忘講武孫吳特節
度致君堯舜見奠墻經營聖殿蘋華動寄賜儒衣荷
棄芳淚與梅霖相共落江城五月微非涼

寛文壬寅冬日謁拜水野應憂山定光寺亞相

源敬公寢陵一律

元和集

陳元贇

寄跡東溟數十春感公升斗活窮鱗幾年閥閲贍無
自今日丞宮拜有因驥困鹽車憐伯樂龍埋神劍辨
豐城白頭一滴酬知淚銘德千秋永不磷

初謁敬公廟

神野世猷

往歲身為縣宰年宣期今日拜階前金朱暐曄秋雲
映松檜崢嶸旭氣鮮仰德山峯皆列嶽比恩潭水似
消泉少時伏謁多私感無限清風自奏絃

兒岩

上半田川村と中品地村の境半田川筋の例かわる一巨岩にて小兒のごとくなれ
らくとなる石氏ある人討殺しまつる夫より彼地の首と沐にまつて奉沐とうもつ

上半田川村と中品地村の境半田川筋の例かわる一巨岩にて小兒のごとくなれ
らくとなる石氏ある人討殺しまつる夫より彼地の首と沐にまつて奉沐とうもつ
幽谷ふ唐画の風致ゆう

蛇が淵

岸ふ老杉蒼苔として寒くして水
まゐ川筋の源閑ふして彼大蛇がすくまる一勝地

品野村

上中下の三村ふわれ共ゐ伊奈街道に連なる山村ゐ此村の地勢平地すくなく
凹凸ゐれ山の後にわゐて上ゐ下一階級をゐ一段くのさひふ畦をして水
をゐめるゐ彼更科郡の田毎の月にくらべふ名ゐて更科埴科蓼科倉科仁科をと
と唱ひきめしと因

例の里の名ゐう

品野焼

下品地に竈ゐる本業の殘ゐて陶戸赤津のゐ一竈数
五六ケ所わゐて大汗土瓶とゐ稼くゐの器を焼ゐゐ

寂場山菩提寺

上品地村ふわゐ天台宗吉根村竜泉寺末天平年中行基井岡創一
ゐ千手観音の像を作りて安置ゐ一ゐ伝くゐ

瑞應山祥雲寺

因村ふゐる曹洞宗白坂雲奥寺末天文年中南部の城を猪井内
膳正信定の建立ゐ一ゐ伝ふ徳川左京亮信忠君の
ゐ一ゐ猪井を家号ゐ又松平をも称ゐ一ゐ其頃
ゐさもゐ一ゐ年之則其位牌又甚高老長江
の位牌もゐう

品野古城

因村辰巳の方の山手にゐう

若有隨筆に享禄二年清康君出兵尾州大戦
勝之取品野城賜松平内膳正家重ゐ志ゐ山澄風残翁撰の桶狭
間合戦記ふ是尾州科野の城をば今川より桜井の松平監物家

岩屋堂

中口村半田川筋の支流に侍る一巨巖あり俗ふ岩井堂と云其岩の[illegible]山の麓より門[illegible]の傾き方へ[illegible]に出[illegible]岩の端に又一石ありて其大岩を受く其わりひ[illegible]ありて人[illegible]くお入す中ふ某師仏を安[illegible]ふ堂の称おこる山水奇観に見ち越中[illegible]伐木窟ハ俗ふ判官の西舎しひて其形状ハ岩屋堂ふ彷彿さ[illegible]ふ北陸の海浜東海の山岳に因型の奇巖わ[illegible]実に奇中の一奇[illegible]あり

児岩
おとこ
わらはる
ちちの
ちちの
見れ
わらはれ
元久

不死又何生
不生不復死
生死両相忘
奇哉箇童子
東廉

次信定の孫清定の子小守〻〻〻所に尾張方より向城を構へ日夜攻撃之城主家次甚両の夜敵の油断と窺ひ〻〻不意小子丑半に付城へ取懸り木戸と打破り乱入る尾兵思ひ〻〻次大小弩さ発ぐさ戦ひハ同士討し戦ハ柵を越て逃出る〻〻因て尾軍の渠帥竹村孫七郎敵囚金平戸崎平九郎滝山傳三郎をとらへ五十騎人討死し其外悉く向城を捨て逃去りぬ義元家次が軍功を褒し感状を賜ふと

〻〻〻〻〻村の西北にも古城址一所わり東下の城といふ永井民部少輔居城なり雲寺に位牌わる長江民部〻〻因人〻別人〻姓尋ぬべし

雲見ヶ峯　因村の東の〻三河の国界にわり頂に〻〻四方の眺望たぐひなし考にそと尋ぬ平雅連ヶ方ふ林ぎりて〻や彩るさ杉杉ふと〻〻ハ塊因の名所なるとひあ〻ひて既ふ塊因の郭にあ〻られど山ハ杉杉茂て古方のなにわるひまさ古なと考へきもをきわるに〻〻都人るものゆきやすらふもあるひまさ古なと考へきもをきわるに〻〻洗も捨ぐされるや志げく志る〻て後考をまち

三國嶺　因村と片草村の境雲見ヶ峯の北ふわりて三河の加茂郡美濃の可児郡に接〻て頂上ふ三ツの石わりて國界の標と次國中の高

三國峠
雲見ヶ峯
乘鞍石
谷はしり
柴州人乃
けるれハ
春秋の
庵に
乃ハ有り
綱根
雲見ヶ峯
三國峠東山
ウスイ石
廿三石
廿三石

三國峠
三國界石
五枚山
菅笠の
ちり
秋の山
靜處
片草村
城山
山神
山乃
伊奈海道
上島野村

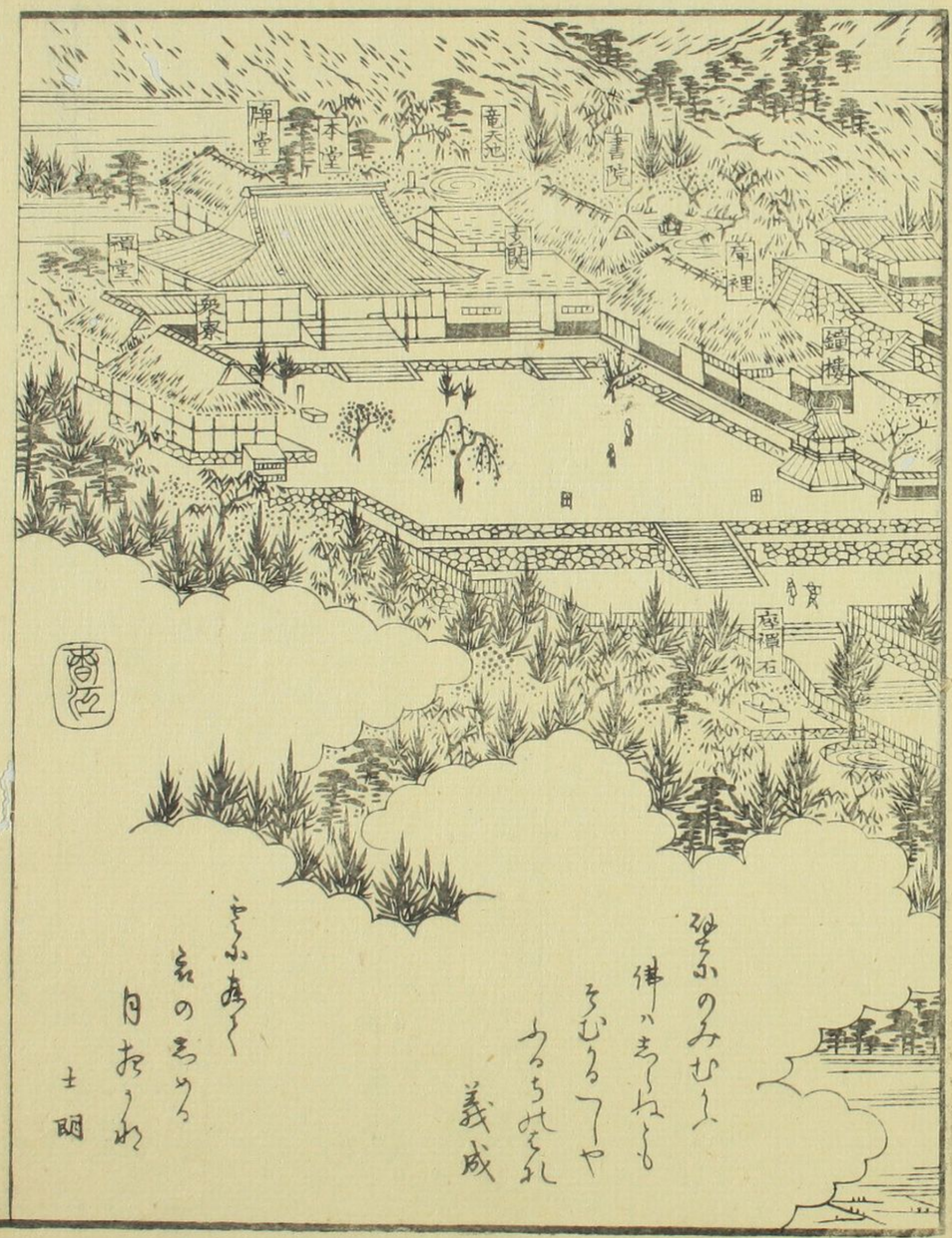
山まて頂より四方の眺望いとゝよろしく一山躑躅多くして春此
未花の頃い見事なるまでに樵路も絶るゝ深山まて尋人稀なる情
ひとしきの甚しきなり 此山へ行ハ美濃国両沢村より登るとゝ
も上ハ平地にて案内者と傭ひ行るハ良しと云ふ 上ハ地にて案内者と傭ひ行るハ良しと云ふ
あるハ老杉日ひをさえぎり昼なを暗し 径路ハ山水の奇観を捨て絶壁石にいる
る四方中三方ともの大岩々形にして巨石おゝ寄するをもてみ石と号く夫より少しく登りて巨石の方の山ハ白岩焼砂岩あり少し平なる所へハ五枚
岩といふもの多くにあり此岩の間ハ巨樹径くいり此所より前棘扶を閉て歩し
ひきまゝ案内者藻てこれを切開き小篠生茂りを踏分て数百歩と切く辛して山ひ
ようの多ハ屋敷三の山へ波濤のごとく連り南海をうるに足るされ千里の風光を終日ながめ
壮観なり又里人の説に天気清朗なる日ハ七ツ塚見ゆるとなり君山翁の賦の小手巻三国嶺の条
小名古屋ハ申酉の方府城なるべし利ハ戌の方柿ハ丑寅の方 猿投山ハ南にあり 三州市北ハ左の方
白川ハ午の方濃州久し利ハ戌の方柿ハ丑寅の方 猿投山ハ南にあり 三州市北ハ左の方

大竜山雲興寺

赤津村にあり曹洞宗 三関村西眼寺末

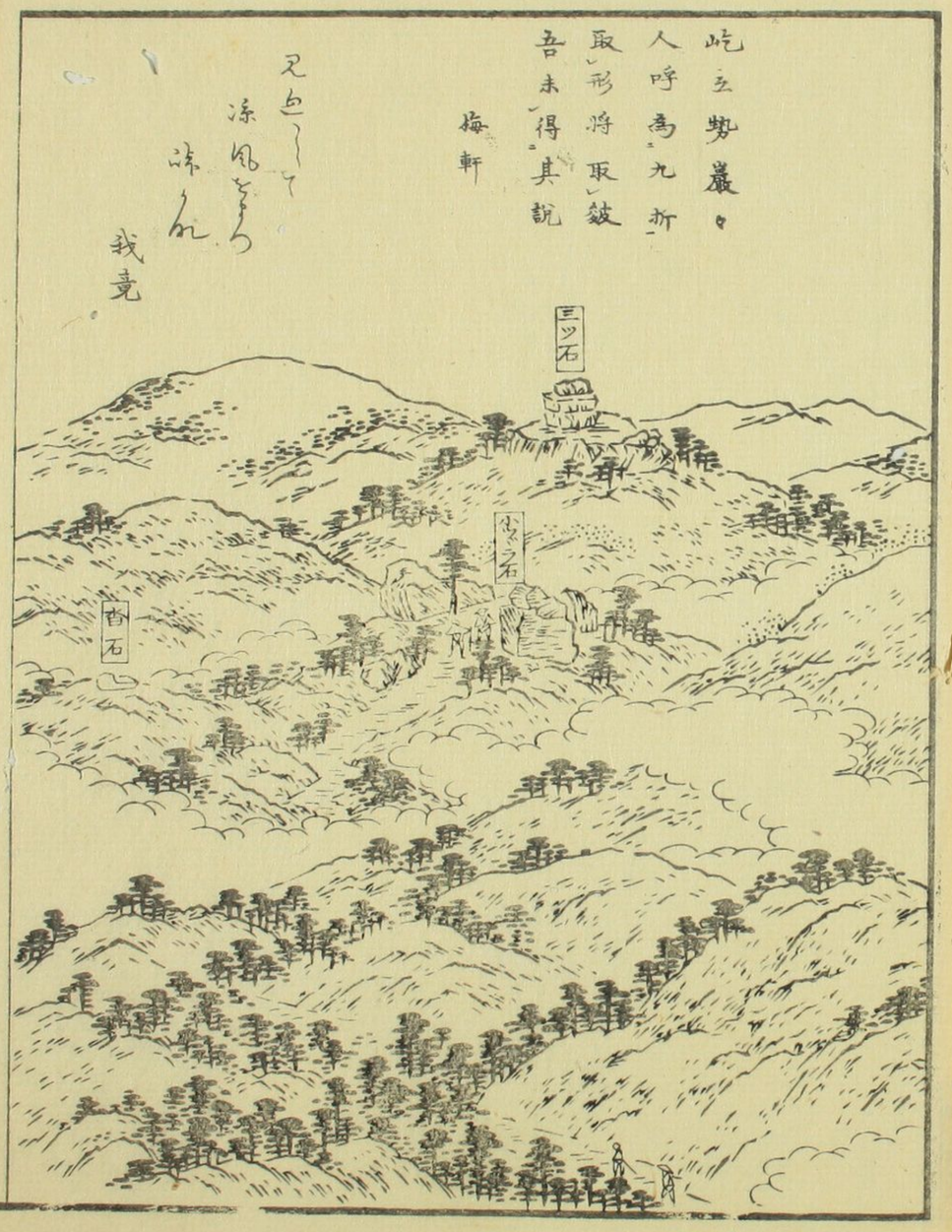
延永七庚辰年 天鷹祖祐和尚の創
建なり和尚ハ越前の永平寺七世の住職なるが当国下津の正眼寺の
住僧なりし時退隠の志ありて山水幽僻の地と撰ミ白坂 赤津の内なり の東に
高松山毘沙門堂の古刹あるゝ地を見立一宇の草庵を結び毘沙
門山高松寺と名づけしが翌年地火に焼まゝ其地も狭く衆を容

るに便りあしく甚と瀬戸赤津の村民頻りに請待しけるハ易地
して今の所ハ移まるさて祖祐和尚開堂の日大竜形ちを現じ瑞
雲を起して祯祥をあらはしけるハ今の山号寺号なり ○本堂 本尊
釈迦如来木像 禅堂衆寮書院庫裡宝蔵鐘楼總門多宝塔あり 竜眼池
本堂の前ハ方丈にして両眼池なるけり二代天先和尚の記に青衣の沐人来りて我ハ此山迹の住者
なるが此山の形ち竜の蟠るが如くして両眼のあきを患ふ所の徒なるのて山眼と号くさるべし
沐こあつまりて永く国民安ずむべし早てひらくもう清らせぬ和尚其言に従い意永
二十五年戊戌七月七日二ツの池をひらく竜の両眼ハ擬せり是ハ彼沐人ハ三河の猿投大明神
なるべしと此の 性空石 表門の外西南の水涯ハ方三八尺ばかりの二丈ばかの岩なり
人ハ鬼と嘲ひて恐れとなり此ハ天魔和尚開剣の後ハ形ちを現ハ表ハ人民を脳まれば
魔と推護しなり衆徒規則ハ法令を犯すものあれハ怪形を現じて如ハ石ハ寺
是を見て傍徒多くハ死に及ぶ天先和尚の所彼鬼時しあり見る面色青て山門の傍
なりと他個せしがある夜和尚竜眼池のかたわら石の上に座禅しあり見る面色青て山門の傍
傍の形ちなりて静座の例をなし常に我ハ山昊の鬼なり久しく山内ハ人見て常に飢餓ハ
みやうやく衰ハ和尚ハ夫を哀ミ救ひて甚困て暫く飢とたすけ彼ハ和尚許諾して般若性空の理を
以て我非幸の幽苦を救ひ給ひ彼ハ和尚許諾して般若性空の理を
説示しまく菩薩戒脉を授けあり人ハ鬼終に得脱し自今已後永く当寺の護法
ひとしく勢ひ給ひ和尚性空上座と名づけ以ハ傍俗をあやまつ次第ハ浄飯と炊ぎて汝が飢
をすくいんとなれば上座ハ例ハ岩上にくづまり鬱首悲泣して礼謝して尽くしが
けくしも杉ハ消失なり是永廿五年戊戌四月廿五日の夜のあけなれば夫なり法毎月廿
五日に火を改め浄饌とし人ハ石の上に抛つ事例式と



望ふのみむら
俳ハ志ねも
そむるてや
ゐるもみそれ
義成

ゆふ春く
雲の志ゐ
自おゐ
士明



屹立勢巖。
人呼為九折
取形將取鼓
吾未得其說
梅軒

足色〳〵て
涼風そよ〻
涼し
我竟

う〻今に至るまで退轉なく〻傳ふ性空石と號けしは徽あり夫より南ちに盜賊入りて財宝を奪ふのみあらず此門内をうがつて却て此門を盜む盜る品をさげて器を掛すれば やう〻ゆりて動き出す事を得らふこれひとへに性空上座の守護ふかれば〻〻と今ふ堂中振もすれば〻〻

龍天水 本堂の側にあり

又長福二年戊寅八月天光和尚遷化し法嗣真翁宗廣和尚住持して演法す翌日二戊子年十月廿日殿前の池の忽ふ童あらはれ和尚法力を示し彼ふ童を小殿に招請して永く當山の護法善神となる其日より殿に向て手を合せ只師資傳法の室にふりて住持すべふ童を天水と号へ名付けれども四時絶ずあり奇代の灵泉なり

座禪石 寺のうしろの林中と本堂の前と二所ふあり和尚の禪座の跡なり

経塚 寺の東のうしにあり天光和尚の禪座の跡なり

今八幡の社地なり

葛篭石 寺の東の上頂にあり四方なる数丈の怪石なり其ふ寿石多し

鎮守社 山の東南にあり白山社八幡社を勧請して護法の法ちしるし八幡ふ山の麓にあり〻と兼家二巳年のまた怪塚の地ふ移せり其旨地ふ今猶現没収せ〻まり〻と文禄四年八月信雄ふ

寺領 附あり〻〻織田信秀秀吉公ちふ仮を寄せひとり今に寄干と頒す

寺宝 菅公御自筆 紺紙金泥法華経一巻天満宮神号一幅三社託宣一幅四通妙戴一幅以三幅とも天光和尚芳又開山天鷹和尚衣同九條袈裟ふ秀吉公陣羽織蜀紅錦九條の袈裟大政所御寄附其他数多〻略之

塔頭 大愚軒

毘沙門峯 同村雲奥寺の山脈なり〻むり多門天の堂あり〻〻名づく〻〻山すなわち〻〻てたやすく登りがた

戸越 毘沙門山の麓なりて当所より山径をたどりの夫より陸州 奥州三州ふ原を越るの街道なりて戸越ハ其国界の地なり此所より彼方やはり連山波濤をあり引

後民の富士遥ふ見ゆ戸越の富士と称し雅人好ふ賞美し詩を吟ず

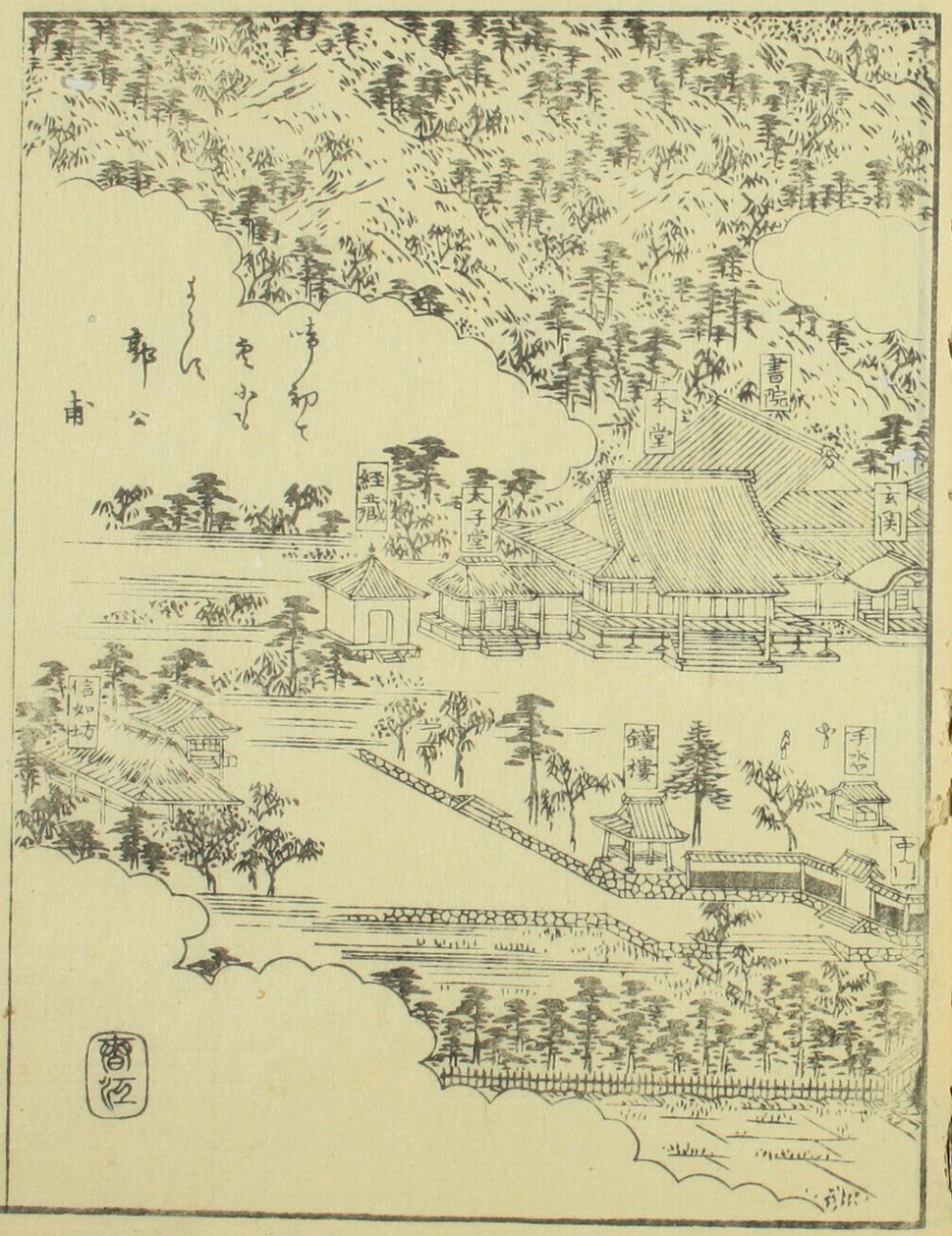
赤津焼 其ふ本業のうして瓶半胴摺鉢ふを多く作る和せり陶戸なり陶付を焼くはじめりうして也も焼出てまた〻〻繁昌あり

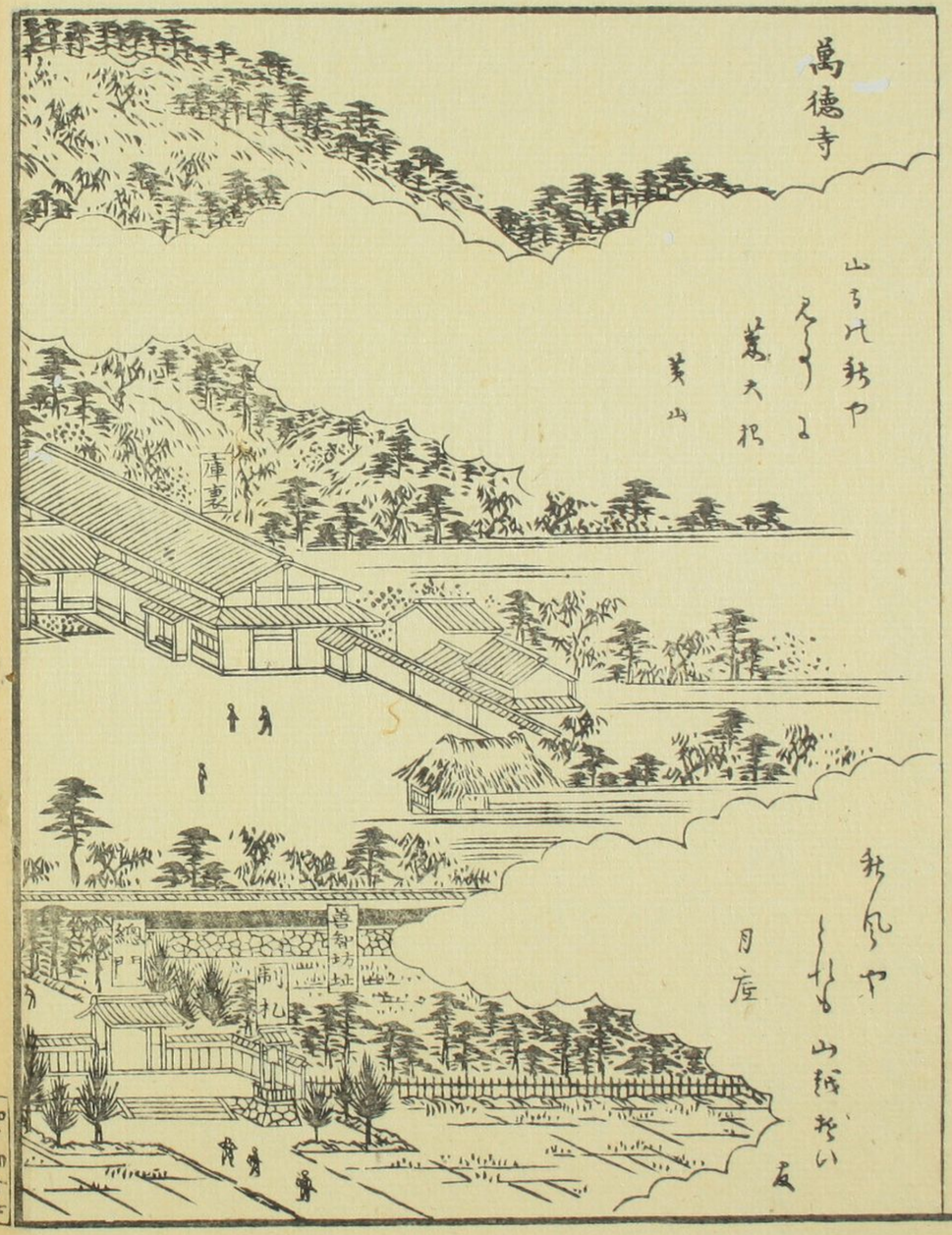
大目神社 同村ふあり今八王子と称す 延喜神名式ふ大目神社本國帳に従三位大目天神と見へる官社なるゆゑ神号も失てその地を大まめり或ひい御守塚なり〻〻此居なりしが天保十一年十月石ひらて当社を開発し神宝等を改めしに内陣中央の上段ふ清正鎧清正印の清名あり〻〻安置し奉り神宝さま〻〻ひらく中に本國帳の古寫也あり一巻ひらく〻其奥書に奉納大目八王子宮〻とあり〻又祈禱札〻ふだき物あり〻て大目八王子大明神御神前天和三年癸亥正月廿二日祭主敬白と見へたり〻〻にたいして〻〻めて式内の神〻なる事を志るあり社

むかしハ羽皮あり〻て中臣氏と称もろ〻〻の社家〻て今ハ廃永の後中臣善右衛門〻〻地〻〻中臣の姓〻〻名のみ残る

関尾山万徳寺 同村にあり高田宗伊勢一身田専修寺直末老分席と称て色衣も免許あり 当ちハ正徳年中の創建なり開山海田上人いふ〻武民豊島郡海源上人の弟子なり〻〻

後京都〻〻親鸞聖人の直弟〻〻〻聖人自筆九字名号真影等授与ひらく〻〻其後寛四五年甲申三月六日今村の城主松


書院
本堂
玄関
太子堂
経蔵
信如坊
鐘楼
手水
中門


萬德寺
芙山
庫裏
善智坊址
南北
月庭

京下総守廣長壹貫四百文の田地を尚ちに寄附す今も其證文を寺宝とす○本尊 阿弥陀如来立像鳥佛師作 太子堂 [illegible]自作十六葉木像天文年中兵火の[illegible]紀年伝失[illegible]其例に古き五輪[illegible]火を遁れ[illegible]火除の像と称し大太わ[illegible]紀年伝失[illegible]其例に古き五輪[illegible]話わ[illegible]又疫病流行の[illegible]尚所の男女大念仏を唱へ[illegible]に[illegible]ら[illegible] 寺宝 聖徳太子傳記五巻奥書曰右此傳者芹田坊山門不出之秘書也於四天王寺[illegible]東門村蓮華王院護[illegible]堂書寫之云云 右傳者竜華長老雖為秘書遣見依[illegible]有誓約之儀密写了[illegible]時寛正三年壬午孟夏吉日 筆者沙弥元恭誌之尾州山田郡内飽津[illegible]保上村於太子堂寄進之寛正五年甲申三月六日 松原下総守廣長[illegible]○太子繪傳土佐光信筆[illegible]四幅[illegible]を中世二幅失[illegible]れ[illegible]新画[illegible]補[illegible]○古鐘の切太子守屋と[illegible]合戦の[illegible]用[illegible]ひ[illegible]ひ[illegible]伊藤[illegible]○太子二歳の木像[illegible]自作○法然上人影像紀[illegible]聖人筆一幅○松平下総守證文○同陣羽織○同位牌陽常院康貞三安居士裏と尾州今村城主松原下総守廣長文明十四壬寅五月十五日[illegible]其の古[illegible]古[illegible]

竜淵 山口川の上流にて水源い三州加茂郡[illegible]川の西[illegible]巖石さ[illegible]川中[illegible]大小[illegible]流[illegible]雷動しなぎ[illegible]い活潑[illegible]を敷[illegible]を竜淵[illegible]頗る勝地かな古今[illegible]文人墨客[illegible]杖を引て[illegible]詩歌[illegible]和[illegible]詠して拾貫次中[illegible]も伊藤三橋が詩を拭[illegible]と門人尾頭備潭の側の巖に彫付て永く世に伝ふ 伊藤公熙字子績三橋と号し静観室と称し府下藪町小住し俗称彦三郎と

いふ古體の書を善[illegible]好事の人にて此竜淵の事紀を求[illegible]書にあふ来りて拾ふ[illegible]此巖上ふ詩を鉄[illegible]筆を[illegible]と門人尾頭中書其書[illegible]生前に其志を果[illegible]て物故[illegible]松山[illegible]文化十年癸酉の夏思ひ立て先浦戸の医師加藤周伯と[illegible]心を分セ中書[illegible]共に官許を得日[illegible]次して久夫ふ命じ深淵の上に足代を掛[illegible]尾頭中書の巖上ふ三橋が詩四言四句と隷書[illegible]書又恩田仲任の記事を小字に夫して石工ふ彫[illegible]尾一ヶ月[illegible]して成就[illegible]

其詩ハ 龍淵躍竜龍今何遷萬古蒼[illegible]但有龍淵[illegible]

大書[illegible]其例ふ細字[illegible]三橋先生愛龍淵勝景嘗謂廣居源倫曰不得題詩龍淵巖余常憾之無幾先生物故至今二十余年

田仲任書其事云文化十年竜次癸酉首夏八日の八十三字を紀[illegible]

[illegible]磨[illegible]自然石の面ふ彫付[illegible]と深淵を隔て望む巖大字ハ鮮明なる[illegible]小字ハ頗る[illegible]尾頭備が書[illegible]紙と得るが刻竜淵の記事[illegible]を道直[illegible]

今彼一紙ふ[illegible]て記事と[illegible]浦ひ[illegible]

[illegible]欽 其後秦滄浪諸子[illegible]に此地ふ来り文章を書く形容[illegible]

夏秋間毎黒雲起東北山驟雨與之而至余神赤嘗不飛于竜淵廣居山人又能説其勝曰出赤津赤二

龍淵

屏風の滝

飛瀑與松韻幽濛
被襲涼醉眠飛瀑
下夢入白雲鄉

釋鬚尾

此滝ハ山ニ川の支流ハ
あるて重岡うり小の方
東へ入る小流をまるのぐり
りハ南方絶壁ちかしてく
恰屏風とこそ云るべく
うるに奇岩怪石の石を
奔流ものハ滝の下流へ
や上りハ右へ折しる
所に滝あるて飛流まる
さま又目ぎまし

三里青松白石碧水潺潺沿流而行水益大山益深
松益鬱蓊石益奇猛斧冠山群馬飲水巨鼇蔵松以外
黄犢嚙草而未行列巖似萬折屏風絶壁如數里步
障忽然大巖壁裂懸流雷鳴渺煙空朦朧而四注上
有天狗之吼下有神竜之潛〻者難測其變吼者不
可見其形是竜淵之勝也先生盍往觀之乎於是丙
子三月十七日從瀬戸往奇景隨歩而生所見愈〻何
所聞皆怨山人說之未悉余曰山人之口猶然〻見二行八
見全形至龍淵隅溪仰高巖畑霧中隱〻見二行八
分大字傍有小記惟而視之即山人書也初山人之
師三橋翁在日常愛此地欲鑱字于懸巖上未果山
人継其遺志請恩田先生記之也嗚呼山人之志如
石故遂得為之事之不朽誰能及之美哉深山易昏
既盡黙酒各題一詩而歸是日也山人及釋寂蘊藤
俊三児壽從爲唯西工玉溪生醉瀬戸不肯隨諸子
歸責生作図生曾遊之腹有粉本一掃而成其巖
別有揭本故不詳載　秦滄浪

各尾頭備の竜淵の巖上に詩と彫りしとぞ
尾頭備の竜淵の巖上に詩と彫りしとぞ　今潛護淵

龍德　僧関尾

不測與世推遷昔顕騰空

名産瀬戸磁器

瀬戸村に陶工多くわかれ皿茶碗茶壺をはじめとして諸の器物を作る陶器をつくる初め瀬戸物といふなり近年に至りて諸国に幾半胴のたぐひ赤津村にて作りはじめて後に全く瀬戸村の産となりて今初めてやがて名産の由名高きなり

延喜式践祚大嘗祭

の条ハ尾張國所造甕八口缶五十口笘坏四十口甑八口瓮十口短女坏三十三口酒甕八口匜十六口片坏四十口陶臼八口餙甕八口高盤四十口坩十二口都婆波十二口酒盞十二口酒缶八口と志ハ〻日本後紀の殘缺に弘仁六年正月丁丑五日造瓷器生尾張國山田郡人三家人部乙磨等三人傳習成業准雜生聽出身と見弘仁式ハ應供神御由加物所司具注所須物類預前申官八月上旬差宮内省史生遣五箇之國造河内和泉一人尾張參河一人備前一人到國先祓而後造作焉と志る日（その由加物とハ延喜式神祇部のハ条に雜器者日由加物と見へられバ雜器のまゝハ中〻〻れどその外〻と志るせる陶器器の類なり）まゝ延喜民部式の年料雜器ハ

うちに尾張國瓷器大椀五口（径各九寸五分）中椀五口（径各七寸）茶小椀（径各六寸）椀廿口（径各五寸）盞五口（径各四寸七分）中擎子十口（径各五寸）小擎子五口（径各四寸五分）花盤十口（径各五寸五分）花形塩坏十口（径各三寸）甑十口（大四口小六口）〻〻るハいづれの地にて焼〻定むゝ為ゝ日本後紀ハ見へる三家人部乙磨等三人ハ山田郡の人と見えバ此ハ

弘仁年中より藤四郎ゝ此ハ尾張かくて焼〻ものと志る〻ハ貞應年中までハ凡四百餘年の星霜を經〻ハ〻ハ〻ハ

母は平道風が女うり（山城国深草の人）成人の後久我大納言通親卿に仕へ五位の諸太夫となる名を景正といひ春慶（或は後慶また春景）といふは別号なり深草の里は母の所なるが故に所に住て土器を製し試みに其業に委しく学び況茶を用ふる法を知り孫ベ只古瓦土器等を造るのみ高麗南京其外の焼物を集めいろいろ斯る器物を製せんと朝暮心を砕くといへども其術を得ざるを歎きと患ふるに越の永平寺開山道元禅師は通親卿の二男なりしが後堀河帝の貞應二年入宋の志ありと聞て終に此人は渡宋を（一説に茂四郎景正は唐に渡り以前清水を経田一番瀬戸に来り窯を造りて陶器を製造せり此頃道元禅師世田密菴院に志ありしが茂四郎事に従師と交り後者入宋せんと云）決し門宋朝は寧宗帝嘉定十六年なり夫より彼地に居ること六年の後南京北京其外國々を巡り陶器製作の秘奥をきはめ又禅師に随て安貞二年の春帰朝す此時廿六歳なりしかして肥後國川尻

盆聞　順徳帝之世有加藤四郎春慶者尾州智多郡人也或言春日井郡瀬戸村人又言泉州堺民　皇都之郊深草里産其詳不可得而識矣好造陶器常恨邑土陶法未盡傳乃自應中會釋道元之宋春慶以為領且遂隨行趨宋五年究陶人之事帰朝為良工遷移数十處過尾濃及京畿諸州而莫所適意乃後居瀬戸村観祖母懐之地厥土黏弗散堅弗沙且采薪之饒異于他邦謂無若瀬戸之樂益弘其道乃薙髪入道有終焉之志其村社中手造獅子麓鎮一隻屋存距今五百有餘歳苟有陶延出春慶手則直數百金大率為王公貴人祕庫之物夫善歌者使人續其聲善作者使人紹其功春慶之緒業其庶幾乎君子之道與尾濃之地以陶衣食以加藤姓者皆是餘裔而斷續不一也獨在瀬戸見為陶長　大藩給俸加藤春暁者世不廢業凡諸陶氏所造出大小巨萬杯槃之類乃日用必需之物皐通四方東過東奥西蹈京畿湖南豐至于擬稱陶器曰瀬戸物遠矣哉春慶之績賛曰坏冶一陶群生得計春慶之業克為可懸後人衣食之数百家百世引之無替以給旦夕之用者弗億之歟

安永八年己亥九月十五日　人見春

陶工加藤景正所蔵
古人東甫翁所筆藤器即肖像之摸圖
春江編摹

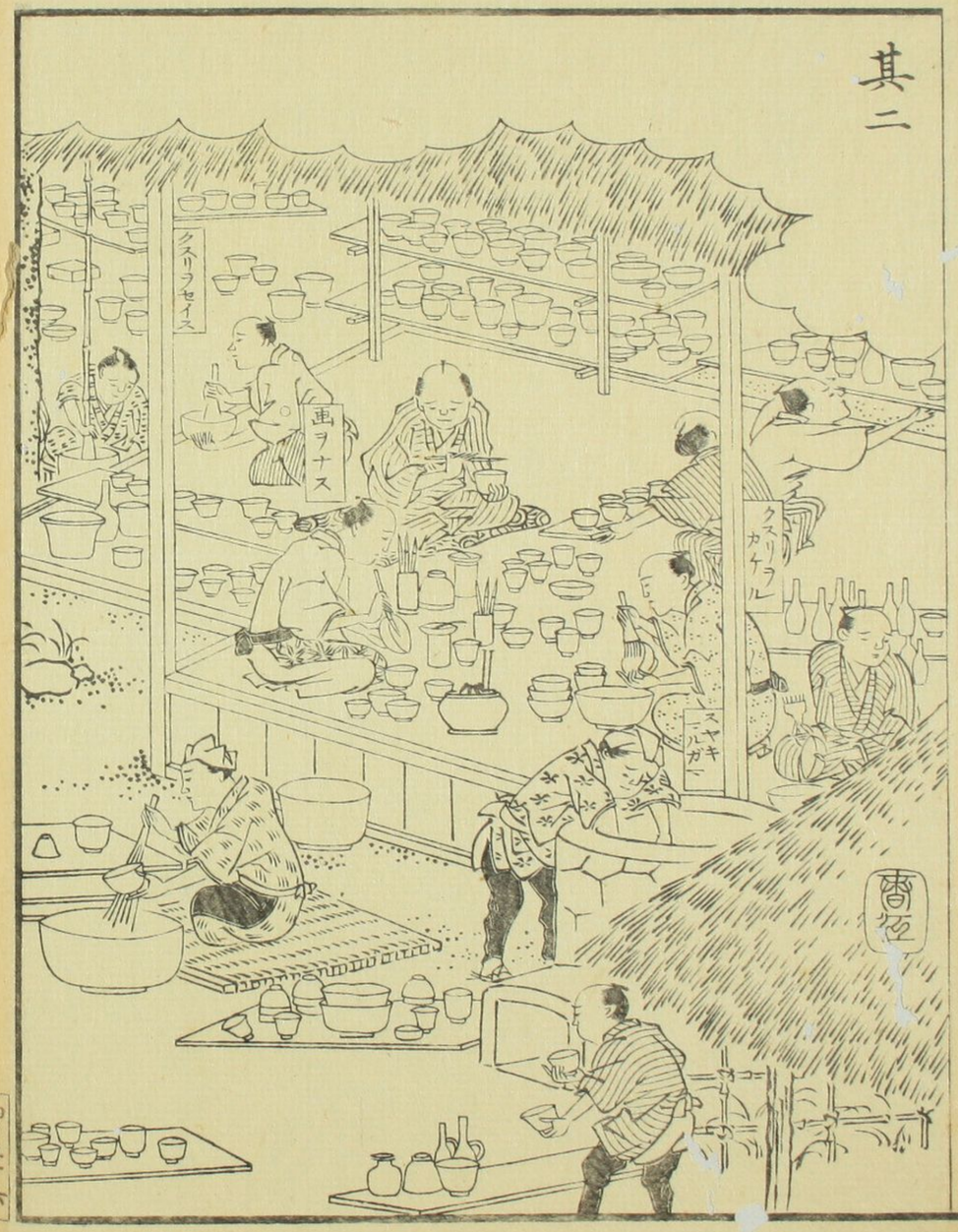
瀬戸陶器職場之一
本業染付焼の二様あり
職場のさま色も大同小異
なり爰ハ古人石華の
図ふ甚き混して画く
ツチ子り
ツチコ子
ツチトホシ
ツチアハセ
スイヒミブゴレ
ツチウチ

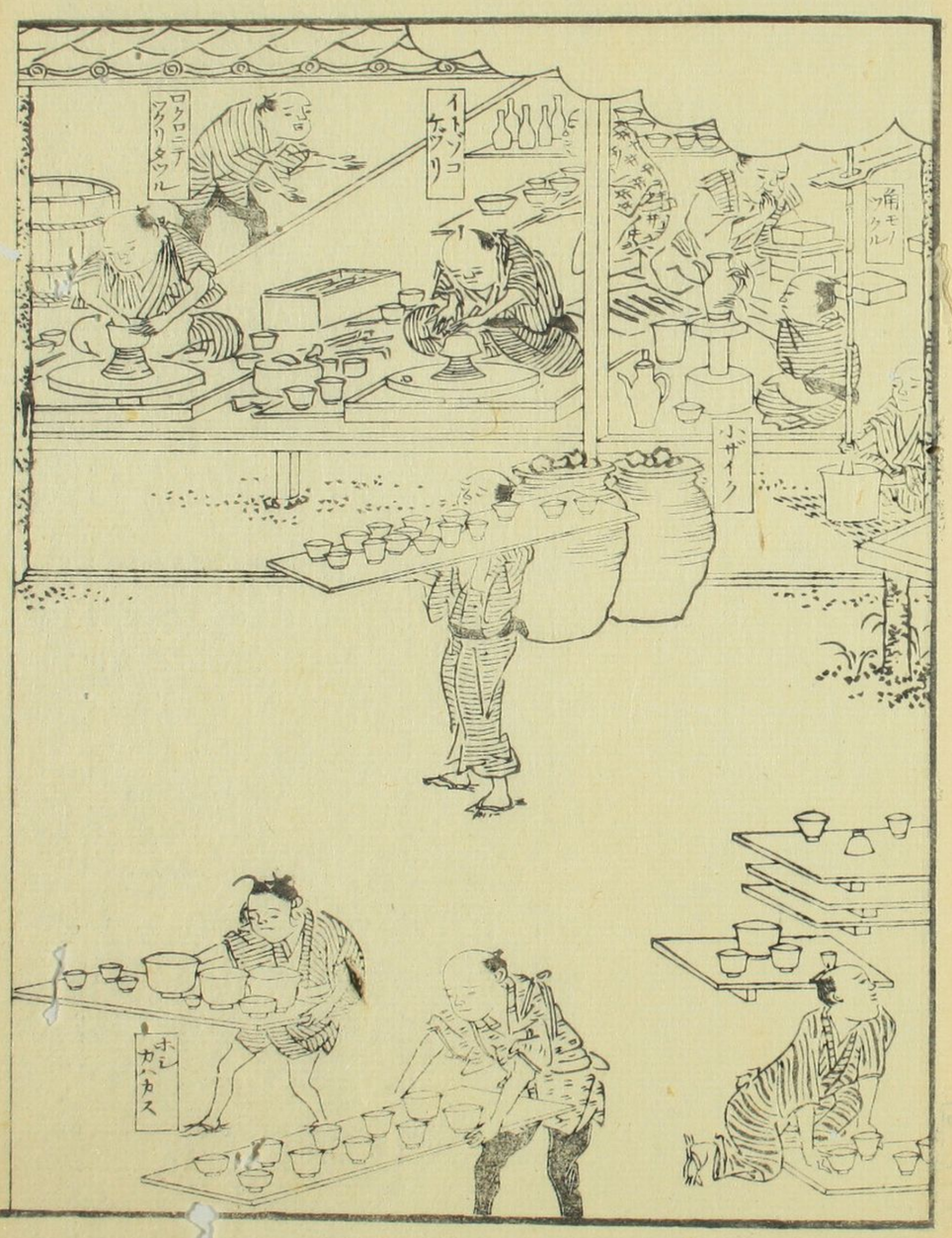
ヒヤカシ瓶
ツチホシ
スイヒツチコシ
スナコシ

の多ちに着船せしかば先此所よりさ窯を作りて伎比より持来
りし土をこねて小壺三ツ造り焼しに最勝なりしかば時の将軍
家又祥庵に奉る（今世に祥庵と名あり）夫より又の砒所備前国松等尾
に到り暫くこゝにても陶器を作り其後深草の里にゆきぬ
此所にて多く毋もろ〳〵れば是より陶器に含ふべきものと為
むと泉州堺江州勢州濃州各務郡野口村当麻郡知多郡半
月村愛智郡赤森村等にて焼試むとすれども いまだ心に適ぜず
故に枝園中山野を巡り見るに山田郡瀬戸村の山祖母懐と云
所は山高くして谷深く水清浄にして陽に向ひ土色も他に異な
て唐土より持来りしに違ふ事多ければ諸州無双の好土なり
とよろこびて爰に居を定め竈を造立て当陶器を製し業とす
藤四郎家貧しきゆへ数多器物を造る業をなすといふとなに多く怪
代に伝りては後く竈屋衰微に及び又祖母懐の古絶んを惜て焼ざりしと云り数年
住居の所なれども瀬戸村に移るあは深川神社の猟犬一匹と共に壺を求わるのゆへなり
今も古竈跡を掘見れば破損じる焼物多ある由内の名人も及ばざる焼加減なりし頃は

今に比類なきものにて器物の名にあたりて
入ざりしかば多く焼物ありしかども 藤四郎が宅址は深川神社辰巳の方田圃
中島といふ所にあり（今移一株）又是より北の方に禅長菴といふ字
物見といふ藤四郎老年に及び男藤五郎に世を譲りて後閑居
の地なりといふ山下に比丘尼庵あり藤四郎が妻の居住
なりし所なりと伝ふ（古今名物類聚に藤四郎唐土の土と業と勢ひ合て初て尾
州瀬戸窯にて焼ると唐物と称し倭土和業にて焼ると
古瀬戸といふ古瀬戸は無名なり大形ふ物来るを大瀬戸といふ小さき古瀬戸ふ是なり入
唐以前焼るものなれば漢といふ是は支那にて堀出し手といふ大名物は古瀬戸唐物なり漢に唐ちなり
中に埋みしものを後に掘出しなるべし一説に遠州公時代に始めしものなるべく
入唐以前の作は出来悪敷て下作にて火気つよく行り上業なれども比類なき
よりもある窯の内にて火気つよく行り上業なれども比類なき出来るものなり後唐のもの
く成るものなりて和のものを合色て焼るを春菱といふ春菱は藤四郎が法名なり二代目藤
四郎作を真中古物といふ藤四郎作と唱るは二代目をさしたる元祖を古瀬戸と称し二代
目を藤四郎と称するは因名二人できるゆへ混ぜざるために唱へるなり藤四郎春菱
も二代目なり三代目藤次郎是を中古物といふ金華山窯の作者なり四代目是も
中古物といふ破風窯より初ることなり正信春菱
といふ者あり正信は何人なる事を詳ならず又後時代春菱と称するは堺春菱吉世
春度人云云小壺と焼ることは元祖藤四郎を云云と云ふ世代共に正信
菱を不詳といふ或伝記に二代目藤四郎は志摩宗伝の聟にて名を正信と云
正信春度と称する茶入なり世に称花藤四郎作蘆四郎系目
藤四郎刑毛目藤四郎を和漢茶入譜に尽こは藤四郎の美名にて云ふ是あの名

其二


クスリラセイス
車ヲナス
クスリフルカケフル
スヤキ
酒屋


ロクロニテアクリタツル
イトゾコケフリ
角モノツクル
小ザイク
オレカハカス

うり混ぜ元祖藤四郎をそしめ歴代の偽説陶工高かいろと世に伝へたるとい大因小異ありて一定しがたし今諸説をとりて折衷しこの小考る次藤四郎入宋の後諸國を巡回し其後尚所にとまり居事い性にて其子孫うりて加藤氏と称する陶工多し（されど其末裔今詳あらず）夫より六作十作などの名人出て世に呼り享保年間に春暁宝唐軒などに迫くい平海九朗ありいづれも職業うとねども思ひ小工夫を凝し一家の風格をうせる妙手にて名工の右に有るもかうねい全く土宜ふるる志にて今赤津の春岱などい陶工中の巨擘にして著んに焼出し其名世に少えより さて後四郎まさ風雅のもとにて一幸ハ温故集に林しその友達ふるる火桶れとしてうるるありて世に志ることろうり

新製袁深付焼

前ふもつるぬく尚所のちい陶器ふよりを焼試るに一ツ〳〵てふ〳〵びとうハ半ふ〳〵れど往ちり南条拓の陶器享和元両年より焼試ちるふ業のかぬ減なぐいまず委〳〵得ざりしに陶工かな吉ちりの二男民吉

とりハ者土の調合焼方の秘奥を練熟〳〵焼初〳〵が其細工の絶妙伊万利唐津いりも文ふり唐製ふもも〳〵ぬ〳〵の深付を焼ふ〳〵次第に窯拵多〳〵うて今ハ本業竈と〳〵も深ふの九竈多〳〵是ふ〳〵小民吉の功抜群〳〵て万世不易の基を開り 上よりも御褒賞ふ〳〵ち〳〵れ民吉吉ふつもに永代苗字帯刀を免ふ〳〵民吉者に伝作せ太宰府の天満宮を宅の後の山上に勧請し左右ふ秋葉金毘羅のふ初ありを竈神と名づけ南村の修験春澄院掌る奥に御國産の第一うるハ村内ふ官舎ふて焼子窯あを改めたりて後府下の瀬戸物舎所〳〵ふ夫より三都及び諸国へ運送を享和元年より陶器ふ焼丸縁汲加茂庵ふの因縁明記余せ〳〵る

瀬戸新窯製記

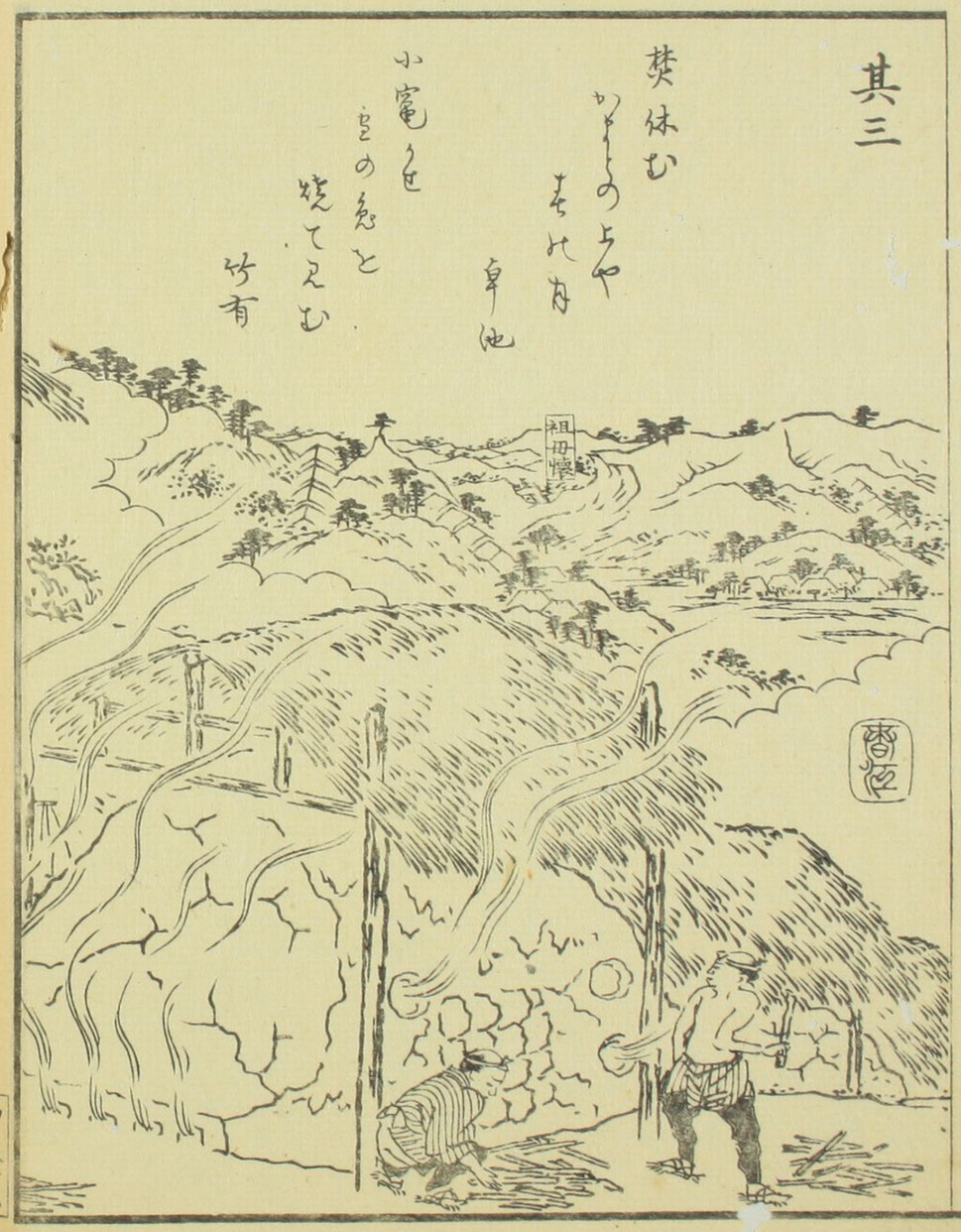
瀬戸之為陶所也久矣陶器之為瀬戸也方語之急呼也（猶木曾須賀波）出之物實顔遍海内貴賤緇素不可（為勢賀波）其地所之加以形質堅實一日無之色古雅故天下呼萬方所出一切陶器專称曰瀬戸物鳥藤四郎春景以来其傳已久製造固多至享和文化年間春景裔孫加藤吉左衛門景高始煉石為坏其子吉右衛門晴生與弟氏吉保賢又盡巧思造出祕色諸陶可謂奪千峰翠矣夫田青者漢土猶且不産遠資諸外蕃況本邦伊萬龍山靖窯乎晴生等能識瀬戸有如此靈釉而採之用之嗟春景之神於陶必有知於數百載之前然而留以貽後之人耶今四方傳賞賈鬻千萬嘖々歎美海外諸國館于崎陽又往来于東都者多錢購求重載而歸云晴生之子吉次郎請予記其事因書此説與之若夫春景事蹟世皆知之故不贅

天保三年壬寅二月　本藩　神埜順蔵世猷記

其三

焚休む
かまどの上や
きれ丹
阜池

小竈を
皇の爲と
焼てゑむ
竹有



六作十作の事

永禄六年信長公國中巡覽の節瀬戸にて名家白作と云ふを定めたまふまゝ天正十三年古田織部正重勝名家十作と定めり添其名家名人のうち六作のうち石ちの子孫今の加賀藩侯の祖家うり

六作 太長十 丁新兵衛 ○後白 十茂右衛門 口宗右衛門 口市右衛門うり

まさ一説に吉兵衛 新兵衛 江存 宗白 茂右衛門 源十郎 ゝ

十作 七半七 廿六兵衛 山吉右衛門 七治兵衛 力八郎二 の一佐介 一元藏

㊀友十 ㊁金九郎 イ丈八

祖母懐土 因村辰巳の方にあり陶工の用ふる絶品のちかして今官禁しうり根ふ事あるべ

伝へ云ふ藤四郎が祖母或時山路を見巡りあるいて沈回しゐ所そこにて得懐かして埋し

友に名づくゝ云ふいふあん清凡に祖母懐の土は尚所のうちにあり玉禁して食にあり

ざれば死すと云ふ武汲に祖母懐は土の名ふ云ふ此名ふうり 韓玉集に載る古竈のうちに祖母

懐竈は所をうばり懐ゝ云ふ上作竈ありし記せり按ずるに所ありてさに出るなやて此名をち

の名ふ負ヒ名べ一

古窯跡 因村の山林馬ヶ城をこめ所くにあり其内藤四郎窯とひ伝ふるい 椿窯 峯出ず根窯

寺宮窯 禪長養窯 朝日窯 細倉窯 古瀬戸窯 所ヶ源氏窯うり 二代目藤五郎窯とい

ゝい猫田窯 南洞窯 板屋窯の三ヶ所うり三代目兎四郎窯は 茨迫間窯 古林窯 反窯 山脇窯

等うり此外小屋ヶ根窯 萱原窯 松留窯 保天嶺窯 水晶嶺窯 大垂窯 うり 大垂窯 うり 尚

所産土神〈就ビ高麗犬を焼ゝ云ひ伝ふ又未社山神〈茶入を焼て奉納も是と後世

山神茶入と云ふ此山非の焼出ふ後茶入を埋り其上に樟の本を植ゝ云ふ其樟大樹とうり

て存せり又源氏窯ゝて赤多川の茶入を焼き朝日窯ゝて焼ゝ茶入を朝日春慶と称す

陶器土取場 因村の西所ゝにあり奥印所囲 高根 蜂矢 日ヶ嶽 反窯 五位塚 鳥ヶ根 梅の

木 白地 小左定納等はあり 移年一かの内ゝ尚所ハ陶器ふ用ふる ち数品を

出せり近村にも出る所あるも他者ハ細工に用ひるゝ云ふべきれば茂四郎在世うり

今に到り六百餘年の星霜を経て埋れし

実に陶器ふ色の

ち化ゝ云ふべ一

信長公瀬戸の陶工ふ御朱印と賜ふ図

ある時信長公地理巡覽のうち西所ふ

来りうり陶器の窯

上覽ありて作人と

うふ其文と

一彫戸焼物釜之事

必ず規彼於其所

可焼之外他所一切

釜不可相立者や

天正十二年正月十日

信長朱印

茂右衛門

とて陶器のうちむしうり

他ふ比類なうさ級模ある地と

人うにまるとうろうり

南所ハ東南北ハ山嶽連リ中央ニ瀬戸川流レ村落ハ多ク山傍ニアリ
北新開南新開宮脇長郷長
河長の五組ハ名ヲ呼ブ　一村農商ハ多ク家居モ他村
ハ多ク石垣ヲ築ク　礫器（イエゴロ或ハカマイタ或ハ柔硬ヲ問ハス用ヒタル室又臺状ノ物）ヲ作リ組立ル事モ多ク
赤津焼ト用ヒ山ノ半腹ハ所々ニ窯ヲ築キ薪ヲ焼ク小窯（赤葉窯ノ事　茂四郎窯モ云）　丸窯（深田窯ヲ云）
ハ陶器ノ烟絶ル事ナク日々ノ運送ハ車馬或ハ歩行ニ荷ヒ物ハ
府下ヲ経テ六里ガ程朝ヨリ夕ハ引モ切ル城東一ノ繁華ヲ
ナシ農業ノミ村立ニハ又自其ヲ為サヲ雅趣ある土地ハ行
ハ風流好事ノ士人ハ必ズ訪ベキノ一勝景ナリ

深川神社

（同村ハ今八王子社ト称ス）

延喜神名式ハ山田郡深川神社本國帳ハ従三位深川天神ト称ス官社ナリ○本社（多伎　五男三女神ナリトハ天忍穂耳尊天穂日命田心姫命湍津姫命市杵島姫命ノ八ツ子ト云）　末社（神明社白山社八幡社奥宮社弁財天社陶彦社ト社ハ陶祖加藤四郎左衛門春慶ノ霊ヲ祭リ五行ノ霊ヲ相殿ト仕ル）
竈神ヲ云　瑞籬拝殿鳥居等ナリ又石燈籠ハ三都ヨリモ寄附ナリ○例祭
本社九月十五日馬の頭棒の子竈神三月十九日獅子八月十九日馬の頭　神宝狛犬一隻（茂四郎ノ造リテ奉納ニ云フ伝ヘ青茶の陶器ニテ古キ物ナリ）

二疋ナリ中世ヨリ之ヲ今ハ一疋ノミ残リ之レモ足ハ折レ全ク伝神酒壺一ツ因人ノ祀ル共ニ時代ナル物ナリ　又鐘ノ銘ハ娑婆世界南贍部
州大日本國尾張山田郡内瀬戸村伊勢天照大神白山妙理權現八王子
鐘也願以此功徳普及於一切我等與衆生皆共成佛道永享十年戊午
十一月吉日大檀那瑞竜集博願主敬白ト見ユ　藤四郎南社ハ茶
竈ハ陶器ノ創業ヲ祈ル所ニ満茶ノ夜是ヨリ巽ノ方ニ非数ノ古ク
ト義ノ告ヲ則神勅ハ陸ヒ行テ見ル所ニ祖母懐ニ入レ脱ガ
ヌ限リ終ハ此ヲ得ク　皇國ノ陶器ノ魁ヲ焼出セリ是
ハ人神ノ恵ヲ以テ神徳ノ人ニ知ル所ナリ

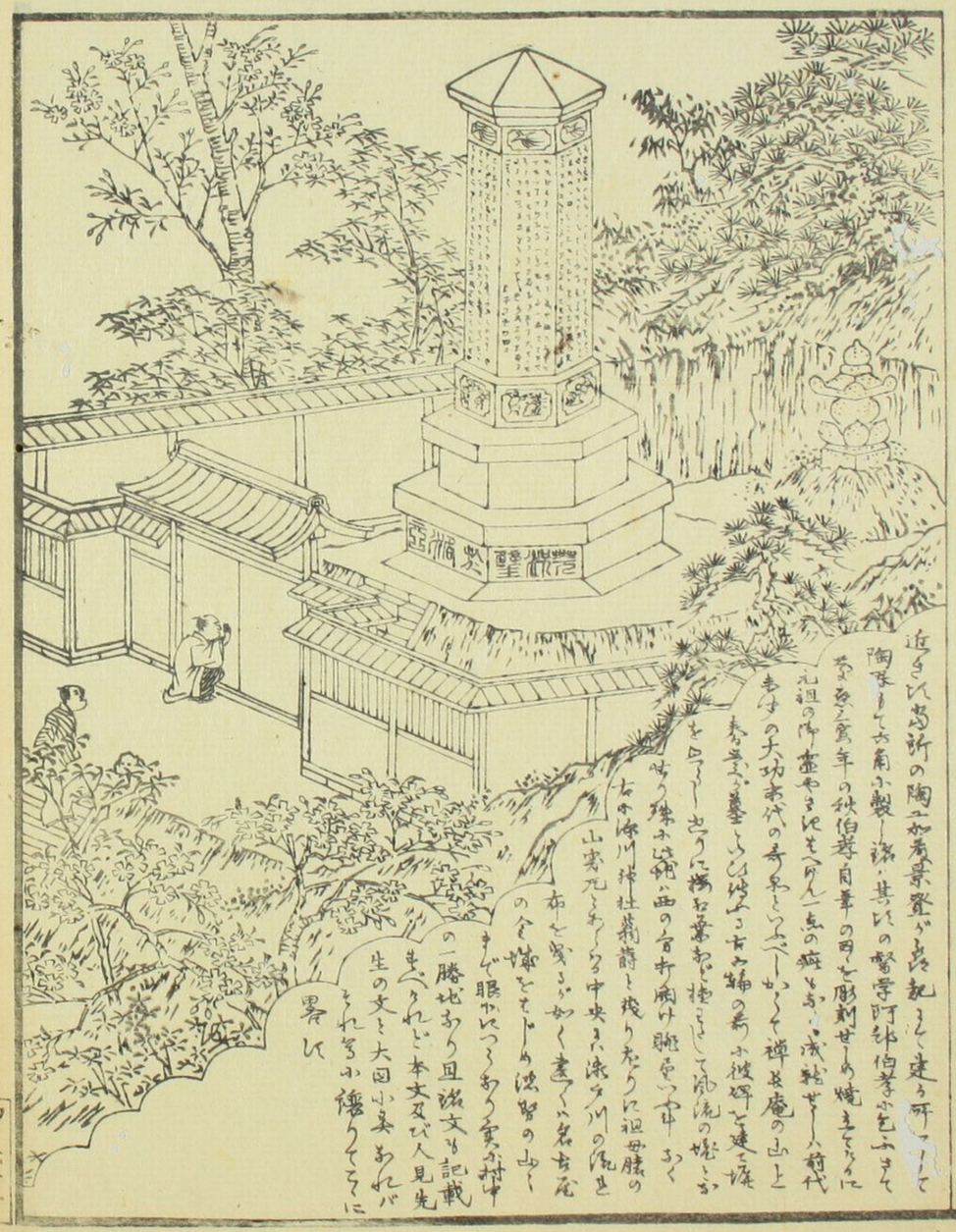
大正山寶泉寺

（同村ニアリ曹洞宗白坂雲奥寺末創建年月詳ラカニセス地蔵并又ハ寺内ニ
十一面観音ト安置ス行基菩薩作ト云フ縁ハ慶長年間ノ西ニ観音山ト云フアリ
リ其所ニアリシガ時境内ノ樹山ヨリ出火シテ堂宇悉ク焼失セリ　後ニ南方（うちもとの伝）
ニ藤四郎木像又位牌アリ陶舎加藤四郎春慶ト造ル　泰澄大師作ノ不動明王ト云フ元来灵佛
ナリ）

修験泰澄院

（同村ニアリテ南山派ノ修験ナリ一宇ト造ル　泰澄大師作ノ不動明王ト云フ元来灵佛
ナリ）
ハ院号ノ起リ所ナリ東申青面金剛ハ恵心僧都ノ作又十一面観音ト堂内ニ安置ス聖徳太子ノ
作ナリトテ近隣村今村ノ城ト称シ伝ヘ慶長ノ古ヲモカヘリミル　ト南院ニ寄附ス官殿ニ文明三年
三月ト称シ伝ヘ慶長ノ古ヲモカヘリミル　城東北所ノ三十一番ニ祀セリ七月十七日夜万燈ヲ燃ス
ヲ竹ヲ数百ノ枝ヲ焼ヒ合ヲ云フ　ヲ以テ火ヲ点ス甚タ天ニ映シテ四囲ニ

陶祖加藤春慶碑銘



近き比尚所の陶工加藤景豊が造記して建て所ありて
陶祖と云て六角小製一碑、其比の醫学阿部伯孝が記ふまて
芳名を寶年の秋伯孝自筆の四字を彫刻せし燒まてらに
元祖の御霊やまひをへ月人一点の疵もなく成就せし人前代
未聞の大功未代の奇宝といふべしかくて禅寺庵の山上
春慶の墓とゝ仏法の古み輔の為に彼碑を建て塔
を立てしとゝ共に楊梅葉和歌を捧ゝして流の姫とか
ゝ殊に此地の西の台町周り眺望つゝ中ゝ
右の御川神社前蔵ゝ殘りたりに祖母藤の
山寒花とゝ有ゝる中央に流れ川の流れ
布を敷るかゝく素くゝ名古屋
の全城をもとゝ城閣の山ゝ
まゝ眼ゆにつゝ有ゝ実ゝ村中
の一勝地ゝ有ゝ且流文も記載
せゝられゝど本文及び人見先
生の文と大同小異ゝ有ゝれバ
ゝれ写ゝ略ゝて
畧ゝ

吳服ずきに由て寛文ハ寶暦年中より數りて當代まで三世と稱するが遠州秋葉山（日　）の雜行を勤む故小安政の分に成り手作者の多くと宜び秋葉山の宝前に月赤の奉額ありて世人わすれざる所なり

尾張名所圖會後編卷之四畢

清水文庫

四ノ六十二